

僕は築く、邪神系女子
によるハーレムを!! ?

グリムリッパー02

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

あてんしょん！

この作品には以下の要素を含みます。

- ・ 主人公外道
- ・ 主人公捻くれ
- ・ 主人公マイナス
- ・ 擬人化

これらを全て許してくださる聖人君子様がたはそのままお進みください。それ以外

の方はブラウザバック推奨です。

尚この作品の時系列は遊戯王GXにはいる前に分岐した平行世界となっております。
十代などの有名キャラは出ません。(一部例外あり)ご了承ください

目次

デュエルを始めよう	1
姉妹探しを始めよう	22
交渉を始めよう	39
落としあいを始めよう	53
学園生活を始めよう〜TURN	1
学園生活を始めよう〜TURN	70
学園生活を始めよう〜TURN	2
祭りを始めよう	106
祭りを始めよう	83
祭りを始めよう	117
〜TURN〜2〜	

デュエルを始めよう

僕という男は実に変わっている。

そう思ったのはいつだったか。

動けば邪魔者扱い、喋れば罵倒を浴び、気づけば一人だった。

だからと言って傷つくわけもなく。いや、違うね。傷つきまくったけど気にすることなく、普段通り適当に過ごしていた。

そう、今日この日まで過ごしていたんだ。

死んだ。結構簡単にぼっくりと。義務という名の苦行。学校という名の牢獄に向かう途中、背中を刺されて死んだ。

殺したのはいつも僕を虐めていた奴だった。

虐めていた奴が普段通りに過ごしてるの見てキレて殺人犯すとか今時の若者のキレやすい性格を大幅にこしちやつてマジウケるなんて感じだけど、そんなこと言えるわけもなく痛みは徐々に消えていく。というか感じなくなつて最終的になんにも感じなくなつた。

さて、乗っけから読者を絶望の淵に落とし込むような語りから入った訳だけど、皆様不思議に思ってるのではないだろうか。なぜお前は死んでいるのに語っているのかと——

何故と聞かれたら答えてあげるのが世の情け、ぶっちゃけそれが前世での出来事だからです。

ハイ！転生しました（笑）

いやあ、あるもんだねこういうの。

あの後神とやらにボンと他の世界に転生させられた。あ、因みに特典とか無いよ。そんな大それたものを持てるほど僕は善行を積んでないし。

というわけで、只今第二の人生を満喫しております。転生してから早十数年、二度目の学園生活というわけだね。

これまで劇的に何かあるわけでもなく、普遍的に変わらないぼっちゃライフを満喫してきた。この世界はどうやら悪魔が出てきたり超能力を持てたり、ましてや艦隊が女の子になる世界では無いらしいというのはこれまでの人生で分かった。

では何の世界なのか？それは——

「デュエル実習の時間よ。生徒のみんなは体育館に集まって」

遊戯王の世界

この世界ではデュエルこそ全て。

学校ではデュエルの授業を行いデュエルによって成績がつけられる。

社会では面接はデュエルを通して行われデュエルによって昇進する。

デュエルのデュエルによるデュエルのための世界。それがこの世界だ。

笑えねー。こちららデッキは作ってても友達いなくて碌にやったこと無いんだよ。やったとしたら一人デュエルしかないよ。え？みんなもやったことあるでしょ？一人デュエル。

そんな僕だが、この世界に来てても相変わらずのぼっちだった。

友達はいない、知り合いもない。結果、授業でやらされるデュエルくらいしかしたことがない。それでも前世よりもやる回数は増えたけど。

だがこれも辛い。何が辛いつてまず僕とデュエルをしたがらない奴が多いことだ。

よくドッチボールとかする時、リーダー格がお互い選手を取り合つて最終的に残る奴みたいな？お互い「そつちにやるよ」みたいな感じで物凄く申し訳なくなる。

そんな状況な訳だ。

まあ他にも理由があるといえればあるんだけどね。

そんな感じで今日も一人余った僕は、壮絶なジャンケン大会で負け涙を流すクラスメイトの男子とのデュエル実習に挑む。ようこそ君が今日の生贄さ

「よろしく」

「……………」

目に見えて落ち込んでいる男子。何故かごめんと謝りたくなる。

まあ、そんなことよりもそろそろ始めなければ、先生の目もきつくなってきた。

「それじゃ始めようか。デュエル」

「…………デュエル」

掛け声とともにデュエルディスクはガシャガシャと音を立てライフポイントである4000の文字を表示する。

「…先攻は譲るよ」

「そうかい？それじゃドロー」

デッキからカードを一枚取る。さて、どうするかな…ってこの手札じゃこれ以上の展開は望めないか…………

さて、このデュエルどうなるのかな？

少し口元をニヤケさせカードをディスクにセットした。

「ありがとうございます」

「……………クソッ」

結果は僕の勝利で終わった。これが二つめの理由。自分で言うのもなんだけど僕はある程度デュエルに強かったりする。

と言つてもこの世界、打点ばかりを気にする脳筋が多いせいで詰めが甘いのだ。そんなの僕の元いた世界じゃ通用しない。いや、どうかな？ 少なくとも僕には通用しない。他の人とやったことないからわかんないや。

ま、そんなわけで脳筋プレイは漬け込みやすく、こんな僕でも安々と勝てるほどだ。それが僕に対する敵意に拍車をかけ僕の立場は孤立している。

とはいえ負けるわけにもいかない。

さつきも言ったようにこの世界はデュエル至上主義だ。負ければそれだけで将来に對する見通しが狭まることになる。とはいえ自分がどこかに雇われるとは到底思えないのだけどね。

まあ何はともあれ此処での僕は『嫌われ者だけどデュエルは強い。なにそれむかつく』というポジションなのだ。嬉しくねー。

そうして今日も1日が終わり帰宅時間となる。前世ならこの時、何かしらの嫌がらせがあつたのだが、この世界は違う。デュエルが弱い者は強い者に反抗出来ない。デュエ

ル至上主義はこういった面にも影響を及ぼしている。良くも悪くもデュエル至上主義なのだ。

そうして通学路を帰る。今日はどうしようか、家に帰るかそれともショツプによるか……最近何かと物騒らしいし、遅くなる前に帰ったほうがいいかもしれない……

そうやって家を目指すこと数分、僕はピタリと歩みを止めた。理由はわからない。何故かは知らないけど、なにか、呼ばれたような気がしたからだ。

「後ろ……は誰もいないか。というか僕の名前知ってる奴なんているの？ クラスの奴らですら覚えてないのに」

言つて悲しくなってきた。そろそろ日も暮れそうだし、さっきのは空耳だったんだろう。

『——けて——』

そうして一歩踏み出した後、また聞こえた。それもさつきよりはつきりと。僕はキョロキョロと辺りを見回しながら耳を澄ませる

『——すけて——』

まだだ。まだ小さい。もう少し、もう少し。

『——たすけて——』

聞こえた。確かに、たすけてと誰かが言っている。僕はその場から走り出す。声の聞

こえた場所へ。不思議と声の主はこっちにいます、そう思った。

そうして裏路地の方へ入っていく。そこを右に曲がれば――

「え?」

その場所には一枚のカードが置かれていた。何の変哲も無いカードだ。テキストは……無い。あるのはイラストだけ……それも真つ黒な球体が――

「そこで何をしている」

突然後ろから声をかけられ振り向いてしまう。そこには2メートルもあるだろう巨体の黒づくめの男が。え?なにこれ!?

「――! 貴様、そのカードは!?!」

しまった。咄嗟にカードを隠すもう遅い。男の目つきは殺気を帯たおのへと変わる。

「フッフ、成る程そんな所にあつたのか。手こずらせおつて……小僧、そのカードをこちらに渡せ」

「断る」

「なんだと?」

自分でも驚く程即答していた。このカードは渡さない。何故かそう強く思つてしまふ。

「……そうかならば仕方ない。力づくで行こうか」

ガシャガシャとデュエルディスクをセツトする男。こんなところでデュエル脳かよこの野郎。だがそんなデュエル受けるわけがない。幸い足には自信がある。常日頃逃げ足の特訓だけは欠かしたことが無いからね！

そうして足に力を込め

「おっと動くなよ」

銃う!? What?! なんてそんなもん出て来るの!? そんな物あるならそれ使って止めればいいだろうッ!

やっぱこの世界馬鹿なんじゃねえの?

ってそうじゃないよ! こんなのどう転んでも死亡エンドじゃなかッ!!?

「デュエルを受けなければ死んでもらう」

そんなにデュエルがしたいかよ! クソッ、いいさやってやる。僕はデュエルディスクを構える。そしてさっきのカードをデッキに入れた。あれ? なんて今デッキに……

「さあ、始めようか」

「え、あつ! ちよつと……」

「デュエル!」

男LP4000

僕LP4000

男の声でデュエルは始まってしまふ。こうなったらやるしかないか。

「先攻は貰うぞ！ドロー」

男はそのカードを見るとニヤリと口の端を釣り上げた。僕は彼の手にキーカードが揃っていることを確認しつつ出方を見る。

「俺は神獣王バルバロスを召喚！」

初手でバルバロスか：前世でもかなり高価値なカードだった。

神獣王バルバロス／効果モンスター

星8／地属性／獣戦士族／攻3000／守1200（1）：このカードはリリースなしで通常召喚できる。（2）：このカードの（1）の方法で通常召喚したこのカードの元々の攻撃力は1900になる。（3）：このカードはモンスター3体をリリースして召喚する事もできる。（4）：このカードがこのカードの（3）の方法で召喚に成功した場合に発動する。

「妥協召喚の効果で攻撃力は1900に下がる。俺は更にカードを一枚伏せてターンエンドだ」

さて、こっから俺のターン。

「ドロー」

幸先一発、カードを引く。

「魔法カード、手札抹殺を発動。お互いカードを捨ててその分ドローする」

：伏せカードの発動は無しか。お互いにカードをドローし引く。僕は5枚、男は3枚だ。

「俺は手札から捨てられた暗黒界の狩人 ブラウの効果を発動。デッキからカードを一枚ドローする。更に暗黒界の策士 グリンの効果で場の罫、魔法カードを破壊するよ。」

破壊されたカードはミラフォ。流石はミラフォ、仕事しない。

とはいえ当たれば怖いからな。

「そして墓地の暗黒界の武神 ゴルドの効果を発動。このカードを特殊召喚する」

暗黒界の武人 ゴルド効果モンスター

星5 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2300 / 守1400

このカードがカードの効果によって手札から墓地へ捨てられた場合、

このカードを墓地から特殊召喚する。

相手のカードの効果によって捨てられた場合、

さらに相手フィールド上に存在するカードを2枚まで選択して破壊する事ができる。

「俺はフィールド魔法、暗黒界の門を発動。効果により悪魔族の攻守は300ポイントアップする」

暗黒界の門　　フィールド魔法

フィールド上に表側表示で存在する　悪魔族モンスター
の攻撃力・守備力は3000ポイントアップする。　1ターンに1度、自分の墓地に存在する　悪魔族モンスター1体をゲームから除外する事で、　手札から悪魔族モンスター1体を選択して捨てる。その後、自分のデッキからカードを一枚ドローする。

「バトルフェイズ。ゴールドでバルバロスを攻撃」

ゴールド2300+300=2600

バルバロス1900

男LP4000↓2300

「くっ、だがこのくらいならば！」

「僕はカードを一枚伏せターンエンド」

これで一巡した。初手としては幸先が良いだろう。手札に恵まれた。さて、これからどうなるか。

「ふむ、様子見としていたが成る程。認められるだけのことはあるな」

「認められる？　なんの話だ」

「しらばつくれるな。あのカードに認められた事は承知している。確かに貴様は強い。そこらのデュエリストとは大違いだ」

そうしてカードをドローする男。こいつは何を言っている？

「ならば俺も本気を出さなくてはな」

瞬間、空気が変わる。男から発せられてるオーラがより濃厚に、いやもはや別次元のものになる。これは…ちよつとやばくないですかね？

「俺は六武衆—イロウを召喚」

な！六武衆だ?!さっきのバルバロスが丸々ブラフじゃないか！

「場に六武衆がいるとき六武衆の師範を特殊召喚、更に魔法カード、二重召喚を発動！、六武衆—ザンジを召喚する！」

「なっ……！」

場に三体のモンスターが一度に並んだ。これはまずい

「魔法カード月の書を発動。ゴールドを裏守備表示に変更。バトル！イロウでゴールドに攻撃、効果発動、ダメージ計算を行わず破壊する」

ゴールドが破壊され場はガラ空きになる。

「続けて六武衆の師範でダイレクトアタック！」

僕LP4000→1900

「くっ！トラップオープン。ダメージコンデンサー。手札を一枚捨て、喰らったダメージ以下の攻撃力を持つモンスターを表側攻撃表示で特殊召喚する！僕はクリッターを

捨て暗黒界の斥候　スカーを守備表示で特殊召喚」

「ならばザンジで攻撃だ」

「スカーの効果を発動！ 戦闘破壊で墓地に送られた時、レベル4以下の暗黒界と名のつくカードを手札に加える。僕は暗黒界の術師　スノウを手札に加える」

「フフフ、よく耐えたな。だがそのちっぽけなライフで何が出来るかな？ カードを一枚伏せターンエンドだ」

：「まったく盛大に負けフラグ立ててくれちゃって：だが確かに何が出来る。相手の場にはモンスターが三体。こっちは0。逆境つてのはこんな事を言うんだろうな。」

「：ハハハ」

「何がおかしい」

「いやなに、最近の僕は意外と生温い場所に居たんだなと思つてね」

「なんのことだ？」

そうさ、僕はいつもこうなくてはならない。周りは全て敵だらけ。いつ負けようとも知れない逆境の中。背水の陣を引いて生活する。負け戦こそ僕の土俵だ。

だからこそ啞う。それこそ狂った様に。

『成る程、貴方様なら私を扱うに相応しいですね』

突然声が聞こえる。その声はどこまでも僕の中に響き、溶けていく。さながら闇の様

に。どこまでも聞き入っていたくなる声だ。

『さあ、私を引いてください。この勝負、勝ちますよ』

その声に導かれ、デッキからカードを引く。

「……へえ、そういうことか」

ニヤリと口元が吊りあがりる。確かに僕にピッタリのカードかもしれない。

「それじゃあ行こうか。僕は暗黒界の門の効果を発動。墓地のページを除外し手札の暗黒界の導師　セルリを捨てる。続けてセルリの効果を発動！相手のフィールドにセルリを特殊召喚する！更にカードを一枚ドロー！」

「俺の場にモンスターを召喚するだど？馬鹿め！血迷ったか」

「鉄板のセリフをどうも。セルリは召喚に成功した時“相手”の手札を一枚捨てさせる。その相手つてのは僕のことなんだ」

「なんだと?！」

「僕は手札の暗黒界の術師　スノウを捨て効果発動。暗黒界と名のついたカードを一枚手札に加え更に相手の墓地からモンスターを一体特殊召喚する。僕は暗黒界の取引を手札に加えバルバロスを特殊召喚」

「な、俺のバルバロスが！」

「まだだ！暗黒界の取引を発動！互いにカードをドローし手札を一枚捨てる」

捨てるカードは暗黒界の尖兵 ページだ。

「ページの効果で特殊召喚。更に手札から魔法カード、死者蘇生を発動！墓地から手札抹殺で捨てたダブルコストンを召喚！」

こちらも一度に三体のモンスターが並ぶ。この展開力には男も目に見えて驚愕していた。だがこれでは終わらない。終わらせない。

「最後だ。ダブルコストンは闇属性モンスターのリリースに使用するとき2体分として扱う。僕はページとダブルコストンをのモンスターをリリース」

「三体分をリリースだと?!まさか!!」

「来い！邪神アバター!!?」

その黒は全てを飲み込む。そう光ですら。光の反対は影だ。これは言うならば闇。闇は光すら飲み込み喰らう。

人はそれをなんと表現するだろう。絶望?悪夢?最悪?その全ての頂点、邪神アバターが今ここに降臨した。

「ア、バター…:本当に…」

男は絶句している。この闇は常人が見ればそこまで飲み込まれる。

僕はこの存在を知っている。といっても前世での知識だが。

前世でもそのチートぶりからOCG化する際、劣化された怪物性能を誇る、三幻神と

対をなす三邪神の一体、その頂点。

テキストを見れば、

邪神アバター効果モンスター

星10／闇属性／悪魔族／攻

?／守

?

このカードは特殊召喚できない。

自分フィールドのモンスター3体をリリースした場合のみ通常召喚できる。

(1)：このカードが召喚に成功した場合に発動する。

相手ターンで数えて2ターンの間、相手は魔法・罫カードを発動できない。

(2)：このカードの攻撃力・守備力は、「邪神アバター」以外の

フィールドの攻撃力が一番高いモンスターの攻撃力+100の数値になる。

どうやらOCG版らしい。だからこそダブルコストンを使用できた訳だけどね。

「アバターの効果を発動。アバターの攻撃力はフィールド上で一番攻撃力の高いモンスターにプラス100される。この場で最も攻撃力が高いのは神獣王バルバロス。バルバロスの攻撃力にプラス100されて3, 100だ。バトル、セルリに攻撃！」

「ならばリバースカードオープン！攻撃の無力化！……！なぜ発動しない!?!」

「アバターは召喚されてから相手ターンから数えて2ターン罫、魔法を発動できない」

「な、なんだと!?!」

「これで終わりだ」

男LP2300↓0

「な、私が…」

男は地に伏した。ゲームは僕の勝ち。とはいえ危なかった。アバターがいなければどうなるかは分からなかった。

僕はもう一度アバターのカードを見る。先程とは違い確かにテキストが書かれていた。どうやら僕は主人として認められたらしい。

「……認めぬぞ」

ふと、下から声が聞こえる。見れば男が憤怒の形相でこちらを見ていた。

「…認めぬ！断じて認めぬ！この様な敗北で俺の運命が終わるなど断じて！」

そう言い銃を取り出す。しまった！デュエルのことばかりで銃の事をすっかり忘れていた！

「死ねえ!!？」

パンツと放たれた音に目を閉じる。が痛みはいつまでたつてもやってこない。いたい何が…

目を開けたそこには、黒い闇が球を防いでいた。球は下に落ちることも無くドップリと飲み込まれていく。

『まったく…デュエルで負けて尚逆ギレするなんて…諦めの悪いお方ですね』

後ろから聞こえる声に振り向けば、黒い髪に黒い巫女服を着た女の子が…歳は僕と近いくらいだろうか

「私も痛くないわけじゃないんですけど…いや、それも割とありなんです…」

状況が飲み込めない僕をほっとき一人でブツブツと喋り始める女の子。

「なんだこれは！なぜ当たらん！」

男は弾を連発するがその全てが僕に届く前に闇に飲まれていく。

「いつまでもこうして楽しんでいたいんですが、貴方は少々やり過ぎました。この辺でおさらばといたしましょう」

そう呟けば彼の周りに闇が蔓延る。来るな来るなと叫んでいるが闇は静かに彼の体を包み込みそして

「——ご馳走様でした」

飲み込んでしまった。先程まで彼がいた場所には跡形もなく、ただ闇が広がっている。

「さて、マスター。これでゆっくりお話ができますね」

「…そうだね、アバター」

「あら気づいてましたか」

そりゃアレだけの奇想天外な状況を見せられれば邪神の仕業であるのは一目瞭然だろう。

「分かっているのなら話がいー！こ存知の通り私はアバター。三邪神の一角を担うものでございませす」

「はあ、それはどうも」

「つきましては、今回を機にマスターである貴方様の使い魔、奴隷、精霊としてお側にいる事となりました」

「はあ、成る程……って、は？」

「は？って……私の呼びかけに応え私を使役してくださいましたではありませんか！」

アバターはぐいー！と顔を近づける。近い！近すぎますよアバターさん！年齢Ⅱ友達居ない自分にとつてこの距離感ほもはや未知に等しい。

というか、僕がマスターってそれは正気か？

「私は長い間私を使役する方を夢見ておりました。ですがその頃の私は封印中の身、夢を馳せても実現などできません。しかしこの度何故か封印から解放され外へと飛び出しました！こうなればいざ外の生活エンジョイ！と担い手を探していたのですがどれもこれも私を扱うには魂が弱すぎて喰われてしまうのです。カードはデュエリストがいなければ力を發揮できない。次第に私の力も弱くなっていきました。そんな時私の

近くに貴方様を通りかかったじやありませんか！しかも極上の狂気を持って！これはもう貴方を生涯のマスターとしてお使いするしかない！と此処まで及び申し上げた次第です」

熱弁するアバターはどこか邪神だということを忘れる程、なんとというか変な奴だった。

「それで、僕はどうすればいいのかな？」

「どうすればとは？」

「いや、邪神の主人となって僕はやっぱりさつきみたいな奴に狙われることになるのかなと」

「うーん、そうですね。ですがご安心を！私のマスターは世界一のマスターですのでどうぞ誇りを持ってくださいまし！」

この自信はどっから来るのだろうか、とは言え彼女の好意は素直に嬉しかった。

今まで向けられたものといえは嫌悪感と敵意、それから殺意が殆どだ。だからこういった純粹な好意は初めてで……嬉しかった。

「私はこの一生をマスターに捧げます。誠心誠意、マスターに尽くさせてもらいますね。えーと」

「おっとそう言えば名前言ってなかったね。僕の名前は隈ヶ谷 夕斗《くまがや ゆう

と《》って言うんだ。よろしく」

「はい！よろしくお願いします！夕斗さま！」

そうして握手する。こうして僕は邪神と出会う。この出会いが後に世界を震わせるきっかけになるとはこの時は僕も、ましてやこの邪神だつて知らないことだ。

それでもこの時の僕は、初めて触れた温もりに心を震わせる事しか出来なかつた。

姉妹探しを始めよう

「姉妹を探してください！」

「は？」

そんな事を言われたのは彼女、アバターと劇的な出会いを果たして数日の月日が経ったころだった。

「いや、なんの話？ていうか君に姉妹なんていたの？」

「はい！おりますとも。可愛い妹がなんと二人！」

二人、と言われれば残りの邪神達のことだろう。にしても姉妹かあ…確かにアバターがこんな美少女になっているなんてこと想像できないけどさ…残りといえば、あの屈強なる肉体を持ったドレット・ルートもいるわけだろ？姉妹と言いつつ漢の娘だと言う可能性もなきにしもあらずだ。(誤字にあらず)

「その姉妹は今どこにいるか分かるの？」

「いえ、それがなんとも…ですがあの子達もカードなのは限りありません。生きるためにはデュエリストが必要です。きっと誰かのカードとして生きていることでしょう。そして」

「そのデュエリストは邪神の闇に負けて強いデュエリストを求め続ける生ける屍と化している?」

「おそろくわ」

うわあお、笑えねー。実際問題他人がどうなろうと知ったこちゃないけど、そのデュエリストが無闇やたらにデュエリストを仕掛けるような辻デュエリストにでもなれば事件として取り扱われるだろう。そうなれば下手すると邪神の存在がバレ、それに関わっている僕もそれ相応の組織に追われることになるかもしれない。特に海馬コーポレーションなんてのに追われでもしたら僕の未来は……これは何としても見つけ出したほうが良いだろう。

「とはいえ、そんな簡単に見つかるわけないよねえ」

「です…ね」

ズズズとお茶を飲む。そう簡単に見つかれば苦労なんてしない。ここは焦らずじつくりと——

『次のニュースです。昨夜未明、ドミノ町近くの路地裏で男性が気絶していると連絡がありました。男性は命に別状は無く怪我もありませんでしたが、意識は回復せずうなされていているということです。目撃者によると男性はデュエルをしていた。その際に何か黒い影を見たと話しており捜査を進めています。さて次のニュースは——』

「これだ！」

あんが簡単に見つかるかもしれない。

★

「うわあ、人がいっぱい……うっ！吐きそう……」

「ああ、お劳しやマスター。大丈夫ですか？」

「あ、ああ平気。大丈夫。やっぱ無理」

「マスターアアア!!?!!?お気を確かに！カムバーツク!!?」

事件のあった路地裏前には人がごった返していた。見晴らしのいいビルの屋上から見る様はそれもう……気持ち悪っ！

野次馬とか、暇人なのかアンタ達は……とは言えこんなに人がいたんじゃないか！中に入ることできない。警察もいるしね。

というか、犯人が今も同じ場所にいると限らないじゃないか！うわあ！僕のバカ！これじゃ気持ち悪損だよ！

「!! マスター！近くに姉妹の反応があります！」

「マジで!!」

……やっぱりこの世界の住人は馬鹿なんじゃないのかな？

ともあれ近くにいるなら話早い。さっさと捕まえて家に帰ろう。うん。

「それで？ 姉妹の反応はどこに？」

「あのビルの裏でございます」

道路の向かいのビルか…結構距離があるな。はあ、また階段を下りる羽目になるのか
……

「そんなことしてたら逃げられてしまいます！ 行きますよマスター！」

「行きますよって何処に——イイイイイイイイイ！！！」

アバターに手を捕まれ、そのまま外にフライアウエイ！ って冗談じゃない！ 落ちる
！落ちるう！

「あれ？ 落ちない。てか飛んでる!？」

「ふふふ、私は邪神でございますよマスター。このようなことは朝飯前というものです。
勿論下の者には見えないよう私の闇で保護色に擬態しております」

な、なんと有能な邪神様だろうかッ！ この邪神に不可能の文字は無い！

「とは言えこれもマスターが貴方様だから出来たことです」

「僕だから？」

「はい。私達邪神は何より負の感情を好みます。それを喰らい、時には増幅させることで使用者を暴走させるのです。ですが貴方様は違います。邪神に見初められて尚、朽ち

ることのない強靱な魂。そして邪神の力を補い余りあるほどの負の感情。その負の感情に当てられ私の力も元に戻りつつあるということですよ」

「成る程ねー」

まあそりゃ負の感情は強いでしょう。なんてったって一度殺されてますからね僕。

そんな会話をしながらも僕達は空を飛び向かいのビルへと到着した。

「マスターあそこです！」

アバターが指差した先には、一人の男と女の姿が。男は黙ったまま立っており女は恐怖で尻餅をついている。

ふと、男が手をがさした。その瞬間、女は力なく地面へと倒れた。

『おそらく生気を吸い取ったのでしょう。ニユースで言っていた目覚めない男と言うのもおそらくそれが原因かと…』

「成る程、どうやらアイツが邪神持ちで間違い無さそうだね。行くよアバター！」

『はい！マスター！』

ビルから飛び降り男の元へと行く。着地は、まあアバターがいるなら大丈夫だろう。

案の定、着地の瞬間闇がクツションとなり安全に着地出来た。

『ぎゃんっ！』

「あ、そういえば闇でも痛覚があるんだっけ？大丈夫？」

『ご、ご心配には及びませんマスター。むしろもつと鋭く、体重をかけてくださいいいい
!!!!』

物凄い顔でさらなる踏みつけを要求してくるんですけど!?!さっきまでカツコよかつたアバターさんは何処に行ったの!?

そういえば前に銃で撃たれた時も『割とあり』なんて発言をしてたっけ…

成る程、腐つても邪神、完璧美少女に見えてもどこかおかしなところがあるってことか…

て、そんなことよりも

「君が邪神持ちかい?」

「何者だ貴様。俺に何の用だ?」

アバターから降りながら尋ねれば男の口からは男と女の混じった声が、これが邪神に喰われた人間の末路か…邪神に身体を、魂を乗っ取られ生ける屍として傀儡とされる。

なんとも哀れな姿だね。それとアバターさん?残念そうな顔しない。

「僕は隈ヶ谷 夕斗。君を探していたんだ。生憎、僕もその男と似たようなものだからね」

「フツ、貴様も邪神に操られていると?その割には随分と自我があるようだが?」

「ま、それは人それぞれなんじゃないかな?」

で、どうすればいいの？アバター。君は説得とか出来ないの？

『(無理ですね。今でこそ会話が成立していますが、欲望に見舞われた邪神に言葉は通じません。多分私の事を話したとしても聞く耳を持たないでしょう。それどころか——)』

「邪神持ちならば都合がいい!!?その力、俺に喰わせろ!」

あんな風に力を求めて襲いかかってくるわけね。まあ、最初っからデュエルになることは予想できてたし、此処はいざ尋常に勝負ってことか

「良いよ。相手になろう。君が勝てば僕を喰らい、僕が勝てば君を貰う。それでいいね」
「人間如きが戯言を。良いだろう!」

「デュエル!」

夕斗LP4000

男LP4000

「先攻は譲ってやる」

「ありがたいね。ドロー!...僕はモンスターを一枚裏側守備表示でセット。リバーズカードを二枚伏せてターンエンド」

「ハハハッ!全く進んでいないじゃないか!どうした?手札事故か?」

「まあそんなもんだよ。あんまり言いたくわなけどね」

アハハと苦笑いしながら答える。男は面白くなさそうに舌打ちした。

「まあいい。お前が動かないならこちらから行くぞ！俺のターン、ドロー！……クククッ！見せてやる神の姿を！」

な、開始一ターンで来るって言うの?!

「俺はイエローガジェットを召喚！効果によりグリーンガジェットを手札に加える」

イエローガジェット 効果モンスター

星4 / 地属性 / 機械族 / 攻1200 / 守1200

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、

デッキから「グリーン・ガジェット」1体を手札に加える事ができる。

「更に手札のカゲトカゲの効果を発動！場にれべる4のモンスターが召喚された時、特殊召喚出来る！」

カゲトカゲ効果モンスター

星4 / 闇属性 / 爬虫類族 / 攻1100 / 守1500

このカードは通常召喚できない。

自分がレベル4モンスターの召喚に成功した時、

このカードを手札から特殊召喚できる。

このカードはシンクロ素材にできない。

「そして速攻魔法、サモンチェーンを発動！チェーン3以降に発動する事で俺はこのターン3回の通常召喚を行える！」

サモンチェーン速攻魔法

チェーン3以降に発動できる。

このターン自分は通常召喚を3回まで行う事ができる。

同一チェーン上に複数回同名カードの効果が発動している場合、

このカードは発動できない。

「これにより先ほど手札に加えたグリーンガジェットを召喚だア！フフフこれで三体のモンスターが揃ったぞ！」

場には三体のモンスター。来るか！

「俺はイエローガジェット、グリーンガジェット、カゲトカゲをリリース。三体のモンスターをリリースし神の召喚を可能とする！来い、邪神ドレッド・ルート！」

目の前に召喚されたのは力の塊。圧倒的なまでのプレッシャー。これが邪神ドレッド・ルートか

「アハハハハ!!？どうだ！怖いだろう！強そうだろう！これで我が力！ドレッド・ルートの前では何もかもが無力！全ては我が前に跪くしかないのだ！」

邪神ドレッド・ルート効果モンスター

星10／闇属性／悪魔族／攻4000／守4000

このカードは特殊召喚できない。

自分フィールドのモンスター3体をリリースした場合のみ通常召喚できる。

(1)：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、

このカード以外のフィールドのモンスターの攻撃力・守備力は半分になる。

高笑いを浮かべる男。確かにこの力の前ではどんなモンスターだろうと太刀打ちできないだろう。凄い。凄いんだけど…

(なあ、アバター。ドレッド・ルートとつてもしかして…)

『(はい。お馬鹿です)』

「デスヨネ！確かにその力は強大だ。だがしかし力が全てじゃない。覆すことなんて用意だ。ましてやこちらは裏守備モンスター一枚とリバースカードが二枚。ドレッド・ルートの半減効果は今はいらないと言える。

「ドレッド・ルートでそのチンケな裏守備モンスターを攻撃だア！ファイアーズノックダウン！」

轟音と共に裏守備モンスターが破壊される。破壊されたのはメタモルポットだ

「メタモルポットのリバース効果を発動。互いは手札を全て捨てそれぞれ5枚になるよ

うカードをドローする」

「ふ、ふん！こちらとしては都合が良い！手札が増えたからな！」

「まだこれで終わりじゃ無いからね。手札から捨てられた暗黒界の術師 スノウの効果
を発動、暗黒界と名のついたカードを一枚手札に加える」

「クツ！俺はターンエンドだ」

「それじゃ行こうかな、フィールド魔法、暗黒界の門を発動。効果により墓地のスノウを
除外しカードを一枚捨てる。捨てるカードは暗黒界の闘神 ラチナ。ラチナの効果で
僕の場合に特殊召喚される。更にリバースカードオープン。暗黒界の取り引きを発動！
互いにカードをドローし、一枚捨てる。捨てるカードは暗黒界の尖兵 ベージ。ベージ
は特殊召喚される」

これで二体

「僕はまだ通常召喚していないからね。僕は暗黒界の騎士ズールを召喚」

「フィールドにモンスターが三体！まさか！」

「二枚目のリバースカードオープン！二重召喚！このターン僕はもう一度通常召喚が行
える。僕は三体のモンスターをリリース。アドバンス召喚!!？来い！邪神アバター！」

フィールドに闇が現れる。闇は全てを飲み込む。邪神でさえも

「ドレッド・ルートは後出しだからこそ強いんだ。まあ今回は運がありすぎただけだろうけどね……アバターでドレッド・ルートを攻撃！」

アバターの姿がドレッド・ルートを模したものとなり、ドレッド・ルートを粉碎する。まるで怪獣映画だね。

男LP40000↓3900

「僕はこれでターンエンドだよ？でどうする？頼みの邪神様はヤラレちゃったけど」

相手のライフは残っているのだからデュエルは続行される。が、見たところドレッド・ルート主軸のデッキの様だしドレッド・ルートが手札に戻らない限りアバターには勝てない。実質上僕の勝利ということになる。

「……………える……………」

「ん？」

「うええええん！ルート、お家かえるうく!!!」

「は？」

大の男が幼稚園児の様な声をあげて泣き出した。いやいや！何事!?

『あーあー、マスター泣かせましたね?』

「え？これって僕の所為なの？」

『ルートは泣き虫なんですよ。普段は男勝りな口調で自分を保ってるんですが一度崩れ

ればこんな有様なのです。マスター、彼女をサレンダーさせてください」
「う、うん分かった」

泣きどうしている男のデュエルディスクに触れサレンダーボタンを押す。
するとこちらの勝利と言う映像が流れソリッドビジョンは消えた。

『デツキを抜いて貰えますか？そうすればその男の中から出てこれると思いますから』
言われた通り男のディスクからデツキを抜く。男は地面へと倒れ代わりに男の横に
露出の高い鎧を着た褐色の美少女が。これがあのドレッド・ルートなのか？わんわん泣
いているところを見るとドレッド・ルートなのだろう。信じたくないけれど…

その美少女にアバターはゆっくりと近づく。

『ほうら泣かないの。ルートは強い子でしょ？』

『ふえ？お姉様？』

『そうですよ。ルートの大好きなお姉ちゃんですよ。だからもう泣かないで』
『ううっ、会いたかったですうお姉様あ…！』

ルートがアバターに抱きつき感動の涙を流す。アバターも妹に会えたのが嬉しいの
か目尻に涙を溜めていた。

こうして姉妹は出会えたのだ。

なんて、なんて、

「なんだこれ」

うん。そう言わざるおえないよね。感動とかその前になんだこれという感情でいっぱいだよ。

だって今でこそ俺の目には美少女二人が抱き合ってるゆるゆりで感動的な絵面だけど、実際には気骨隆々とした悪魔と黒い球体が抱き合ってるんだぜ？笑いもこみ上げてこないほどカオスな絵図じゃないか。

しばらく抱き合っていた二人だが、ふとルートの視線がこちらに向く。

『お姉様、彼の方は？』

『私のマスターですよ』

マスターという言葉にルートは驚き、同時に顔を真っ赤にする。どうやら姉のマスターに恥ずかしいところを見せたと思っっているようだ。

『んん！俺は三邪神の一角、邪神ドレッド・ルート様だ！姉貴がお世話になつてるぜ！』

「あ、ああ。僕は隈ヶ谷 タ斗です」

『タ斗さんか！よろしくな！俺はルートでいいぜ』

今更調子を戻す理由とか、男勝りな口調なのに名前にはさん付けなのとか色々ツツコミどころ満載だね。

『ルート、私達は貴方を迎えに来たの。さあ帰りましょ？』

『え？でもお姉様…それじゃ夕斗さんの身体が…』

『大丈夫、マスターは私達を受け止められるお方よ。ルートが心配する必要な事にはならないわ』

『そんな…二体の邪神を許容出来るなんてことが…!?だ、だけど夕斗さんに迷惑がかかっちゃうかも…』

「いや、まあ僕は元から君を連れて帰るために、わざわざ空を飛んだりビルからダイビングしたりした訳だからね。寧ろ来てくれないなら無理やりにも連れて行くよ？」

『そんなことまで!?…分かったぜ。このドレッド・ルート、夕斗さんをマスターと認め付き従うことを誓うぜ!』

彼女の握手に応じる。なんとというか色々右往左往したけど、これで邪神ドレッド・ルート、ルートが仲間になった。

『やりましたねマスター。これで三邪神の内二体がマスターの使い魔として隷属されましたよ!マスターなら世界を破壊する事も簡単です!』

「やらないよ面倒くさいし。ともあれ残りの姉妹つてあと一人なんだっけ?」

『はいそうですね。ルートが此処にいたので後はイレイザー、イレイだけなのですが…どこにいるんでしょう』

うーん、と頭を悩ませる。アバターの探知能力も近くでなければ通用しない。今回は

たまたまルートが馬鹿だったおかげで簡単に事を運べたが次もそうなる確証は無い。

そう思っていたのだが……

『あれ？イレイの場所なら知ってるぞ？』

予想どころか認識すらぶっ飛ばした声

「『本当（か）!?!』」

『ちよっ！夕斗さん近い！近いですう!!?!』

「あ、ごめん」

あまりの驚きに顔を近づけていたみたいだ。僕としたことが……

それとルートさん？そんな鎧つけてるくせになんでそんな恥ずかしがり屋なんですかね？こっちが恥ずかしくなっちゃうんですけど……

「そ、それで？ルート、イレイザーは何処に？」

『あ、ああ。あそこだ』

そうして、ビルのについているモニター指を指す。その場所は――

「マジで？」

『マジで』

「冗談じゃなく？」

『冗談じゃなく』

デュエルアカデミア

交渉を始めよう

邪神とは、なんだろうか。

神でありながら災いをもたらさず神。

しかしながらこの災いをもたらさせるのは人間である。つまり、邪神とは人の立場から見た神の一つの姿なのだ。

簡単に言ってしまうばクラス内のいじめられっ子がいじめられっ子とレッテルを貼られた瞬間、気持ち悪がられるのと同義で、他人からの客観的な押し付けが本人の意思に関係なく表に出ている訳だ。

だが人と神は違う。神とはいわば祈りの集合体。「こうであってほしい」という意思の集合体こそが神そのものなのだ。

だから邪神と言われてしまえば邪神なのである。元がどうであれ、それは邪神なのだ。

そう、邪神…人に災いをもたらさず最悪の象徴…なのだが…

『マスター、今日はなにが食べたいですか？』

『俺はお姉様の肉じゃがが食べたいぜ』

『それはこの前も食べたでしょ。それに今はマスターに聞いてるんですよ』
なんだこれは…キッチンに邪神がエプロン姿で立っている。

しかも肉じゃがって…邪神なのにそんな庶民的なものが好きなのか？というか君達
食事必要なのか？

ツツコミたいことは沢山あるが、これはもう既に日常の風景と化している。この僕、
隈ヶ谷　夕斗の日常はこんな非日常的な物なのだ。

「今日は魚な気分かな。あ、でもアバター肉じゃがも食べたいよ？アレ美味しいから」
『だよな！流石夕斗さん！話がわかるぜ！』

『もうっ！褒めても何も出ませんよ！』

ルートが仲間になって数日と過ぎた。僕達は何気ない食卓を囲みいつも通りな生活
を送っている。

前回意味ありげにイレイザーの居場所を突き止めた僕達だが未だに向かっていない。
というか、行けないのだ。何故かって？理由は簡単。僕は既に新入生の時期を逃して
しまったからね。

デュエルアカデミアはデュエリストにとってまさに憧れの名門校。当然進入試験は
厳しいものだ。筆記そしてそれを越えた先に実技となる訳だが、それは正規の新入試験
のみ。

後からの編入となると筆記も実技も難しく、そして何より編入に見合うだけの成績が必要となる。

当然僕にそんなものは無い。筆記や実技はどうとでもなっても功績が無ければ門を叩くことすらできないのだ。

『にしても困りましたね。イレイを取り戻すのにこんな障害があるなんて』

『夕斗さんは頭が硬エんだよ。バツと入ってバツとバトルしてくりや良いんだ』

「そんな事すると僕の来歴に傷が付いちやうでしょ。僕が刑務所なんて入れられたらそれこそ君達ともおさらばなんだよ？」

『うっ…確かに…』

まあ、正直な所あの学園で邪神の力を使うと後々目をつけられそうで怖いんだけどね。っていうのが正直な理由だったりする。いくら原作とは違うとはいえ何が起ころかわからない。現に理不尽と不条理、非現実の塊である邪神が目の前にいるんだから。

〈へピンポン

『あ、はい。今出ます』

「君じゃ出れないでしょ。僕が行くから。あと一応実体化は解いておいてね」

当然のようにチャイムに出ようとするアバターを止めて玄関へと向かう。出るまでの動作が自然過ぎるでしょ、僕も止めるのが遅れちゃったよ。

それにしても何の用かな？まあ大方新聞かセールスマンの押し売りだろうし適当に流せば――

「ハロー、ナイストゥーミートゥー、夕斗ボーイ」

ガチャカチツ

『夕斗さん？どうしたんだ？』

「ありえない、ありえないありえないありえないありえない!!?」

『ちよ、マスター?!本当にどうしてしまったのですか!?!』

ハッ!とつさのことで意識が get away してしまったようだ。

とにかくこれはなんとしても早急に事態を収拾せねば…

「マツタク、酷いではアーリマセンカ、夕斗ボーイ?閉め出した上にドアをロックしてしまうなんて」

「なっ!?!」

先程閉めたはずの鍵が開けられ先程の男が中に入ってくる。

「それでも私はそれなりの権力を持つていマース。唯の一般家庭のスペアキーを作ることなんて容易いのデース」

高らかに笑う変わった日本語を話す男、ペガサス・J・クロフォード。デュエルモンスター創造主は堂々と不法侵入して来た。



「ソー。タ斗ボーイは紅茶を淹れるのが上手なのデスネー」

「……どうも」

笑顔で紅茶を飲むペガサスに僕は皮肉を込めて返すがきつと届きはしないだろう。

彼はデュエルモンスターの創造主にしてインダストリアル・イリユージョン社の名誉会長。この世界で最も影響力を持った人間といつても過言ではない。

そんな人間がどうしてこんな所に？ 考え付く理由は一つしかない。

「それでどうしてこんな所に？」

「ノンノン、焦りは禁物ですよ？ タ斗ボーイ。今はティータイムを楽しみましょう」

この軽薄な表情には何を隠しているか分からない。が、何が目的かは察しがついている。

「ところでタ斗ボーイ、貴方のペアレントは一体どこにいるのデスカ？ 先程から姿が見えませんが」

「これも、分かっているのだろう。」

「親はいませんよ。姿を見せなくなっただけりあっていません」

「おや、そうでしたか…これは失礼な事を聞きました…お詫びします」

「いえいえ、別に。気にしていませんので」

「そうですか…しかしキッズ一人で生活する事は大変でしょうね。特にマネーなんかは…」

「……………」

ペガサスは飲んでいたカップを一度置き、真剣な表情になる。

「つい先日、ここの近くのバンクで盗難事件があつたそうデース。しかし誰も犯人を見ることは無かつた。大量のマネー達は一齐に消えたそうデース。監視カメラにはまるで『闇がマネーを飲み込んだ』様な映像が映し出されていました」

「……………」

「貴方がやったのですね？邪神の力を使い」

彼の眼光は鋭く、凄まじいプレッシャーを感じる。しかし…

「はい、僕がやりました」

僕は微笑みながら答える。こんな視線は日常茶飯事、慣れたものだ。

それに、相手がその気ならこちらもその気になる。こと口八丁で負け組僕に勝てる者はいない。

「…隠す気は無いのデスカ？」

「隠す必要がありますか？その左目の千年眼ミレニウム・アイにはどんな嘘も効かないんでしょ？」

「—っ!？」

「あ、今はもう無いんでしたね…とはいえ貴方に嘘が通用するとも思えませんし…なら本当の事を話すほうが得策でしょう」

「ユー、それをどこで？」

ペガサスの顔は驚愕の色を隠しきれていない。ダメだなあ、そんな顔をしたら、漬け込みやすくなってしまうじゃないですか。

「どこって、貴方はどうして僕の所に来たんですか？僕が普通じゃない事なんて当然知ってるんですよ？」

「……邪神ですか」

「まあそれもハズレではあるんですが、それに近い物ということですよ」

笑みを絶やさず会話していく。僕が転生者で、前世知識でその事を知っているなんて話しても信じはしないだろう。だったら話す必要は無い。幸い千年眼が無いなら心を読まれる心配も無いのだから。

二人の間に沈黙が続く。時計の針だけはチクタクチクタクと時を刻む。その間も僕はふてぶてしい笑顔を絶やさない。

「貴方はどうするつもりですか？」

「？、どうって？」

「邪神を集め、何をしようとしているのかということデース」

「何をしようだなんて、僕にはそんな少年みたいな夢なんて持ち合わせていませんよ。僕は彼女達姉妹を再び合わせてやりたいだけです」

「姉妹？」

「どうやら封印が解かれてもバラバラになつてしまつたようなので。せつかくの姉妹と一緒にいけないなんて悲し過ぎる。だからこうして彼女達に協力してるんです」

嘘ではない。彼女達のためにも僕は邪神探しをしている。勿論、他にも理由はあるけどね。それはここで話すべきじゃないだろう。

「それより、こんなくだらない話はやめにしましょう。貴方もこんな話をする為にこんな所まで来たわけじゃないでしょ？不毛なお喋りも嫌いじゃありませんが貴方が僕なんかの為に地味なデスクワークをする時間を削る必要はありません。本題に入りましょう」

上からなのか下からなのか、そんなよく分からない提案をする。ペガサスは最初こそ目を細めていたが次第にフツと笑つた。

「貴方はかなり良い性格をしているようデスネ」

「貴方にも劣つていないと自負していますよ」

両者下衆の笑み。子供が見たら泣く事間違いなしだ。

ペガサスは「それでは」といい鞆から一枚の書類を取り出す。

「これはデュエルアカデミアの入願書類デース。そこには私名義で貴方の編入を推薦する内容が書かれていマース。貴方はデュエルアカデミアに行きたいのでしょうか？」

「どうしてそれを？と、聞くのは野暮ですね。しかし良いんですか？僕が邪神を集めることを許可しても」

「寧ろお願いしマース。今日見て分かりました。貴方は邪神を許容している。ならば暴走するものより貴方が持つ方が安全というものデース」

ペガサスが提示したデュエルアカデミアの入願書類。それは言い換えれば僕に最後の邪神を捕まえてこいということだ。

邪神の力は強大だ。それこそ三幻神を抑制する為に作られたその力は人知を超える。暴走しない為に預けるといふならばそれは最善の手だろう。

「それとこれにも目を通してください」
「これは……」

「君とは別の邪神を狙う集団デース。名をウロボロス。彼の無限を司る龍の名前デース」

「ウロボロスか……それはなんとも厨二精神溢れる名前ですね。それで？そのウロボロスは邪神を捕まえて何をしようって言うんですか。まさか僕みたいに姉妹と一緒に暮らせるなんて事じゃ無いんでしょ？」

「ええ、彼らの目的は世界征服だと我々は考えてイマース」

世界征服とは、これまた随分と鉄板なネタで来たものだね。飽きて呆れたを通り越して新鮮で感心するよ。

「それで？ 貴方達からの依頼はそのウロボロスの解体つて事になるのかな？」

「理解が早くて助かりマース」

「ふーん、それで？ 僕らのメリットは？」

「はい？」

「メリットだよ。いくら貴方達が僕をデュエルアカデミアに入れてくれるのは邪神を集める為のメリットだ。僕にはウロボロスなんて関係無いし、もしかしたら僕がそちら側に寝返る可能性もある。そんな僕に貴方達はどんなメリットを与えてくれるのかな？」

こちらとしては、デュエルアカデミアに入学するまでの関係でいたいというのも本音の一つだ。便利道具の一つなんて考えられたら面倒だしね。

しかしペガサスは笑いながらこう言った。

「フフフフ…貴方は一つ思い違いをしていマース」

「…なんのことかな？」

「これは交渉では無いということデース。これは命令、タ斗ボーイに拒否権はありません」

「命令？それはまた穏やかじゃないね。なんだい？罪の黙認でもするつもりかい？」

「ノンノン、ナンセンスですよ夕斗ボーイ。我々が提示するのは貴方達の身柄。もし夕斗ボーイが応じなければ貴方ごとカードを封印しマース」

「!?…………へえ……」

つまりは彼は、「お前を生かしてやるんだからその分働け」と言ってるわけだ。それはなんて、なんて

「なんて僕好みの取引だ。良いね気に入ったよ。分かった、言われた通り僕はウロボロスと敵対しよう。これからは僕の身柄は君らのものだ」

そうして握手を求める。ペガサスは嫌な顔一つせず応じた。

「夕斗ボーイとは良い仕事仲間になれそうデース」

「ええ、本当に」

そうして、ペガサスは帰って行った。

ペガサス・J・クロフォード：成る程。確かにあの若さであれだけ成功してるのも頷ける。僕みたいな敗者とは大違いだね。

「と、二人ともそろそろ出てきてもいいよ」

ペガサスが帰ったのを確認して何もないところに声をかければ、まるで空間に着色するかのよう泣いた美少女が姿を現し……え？泣いた？

『マスター!!?』『夕斗さん!!?』

「おっとと、どうしたの二人とも、そんなに目を真つ赤にさせて」

抱きついてきたアバターとルート（泣き虫 *ver*）を受け止める。彼女達が泣いた所なんて初めて見た、というよりも美少女のガチ泣きを初めて見た僕にとっては内心焦っているどころの騒ぎじゃなかった。

『だつてえ、だつてえ…』

『マスターが私達の為にあのペガサスと対立してくださったことが嬉しくて…悔しくて…』

ああ、なんだそんなことか

「気にしないでよ。アレは僕が好き好んでやったことだ。それに僕が君たちを守るのは当たり前じゃないか、君達は僕を独りから救ってくれた。ずっと冷たかった世界から暖かな闇へと連れ出してくれた。僕にはもう返しきれないほどの借りがあるんだよ」

『そんな！借りだなんて』

『そうですよ！夕斗さんとはいつまでも一緒です〜!!?』

「うん…ありがとう」

二人を抱きしめる。暗く沈み続ける闇、それが僕には心地よかった。

ここは彼女達の世界。僕の世界。ならばこの世界を守ろう。何があろうともそれが、

僕にできる彼女達への恩返しだ。

『でも本当に良かったのですか？もしものがあればマスターも封印されるのですよ？』

「あれ？ルートはともかくアバターさんは分かってなかったの？あの条件の裏の意味」
『裏の意味？』

「ペガサスは僕ごと封印するって言った。ということは、僕には封印されるだけ、もつといえれば彼らにとつて邪神と同等の価値が存在するってことになるでしょ？」

『？はい』

「ウロボロスが僕を嗅ぎつけるまでそう遠くない。きっと理不尽なデュエルを申し込まれると思う。でもそれはペガサスのところに居ようと居まいと同じなんだ。彼らが僕を見つければ僕は正当防衛なデュエルをする羽目になるからね。そうなるとあの条件自体意味を見出せなくなる。後に残るのは僕には封印されるだけの価値があるということだけ」

『！成る程、そういうことですか』

「僕はそれが知れただけで満足さ。これである程度無茶をしても向こうがもみ消してくれるだろうしね。ペガサスが気づいてるかどうかは知らないけど、十分なメリットだよ。これは」

そう説明すればアバターの顔も晴れ晴れとした物に変わる。これでも伊達に負け続けの人生を送ってる訳じゃない。負けても勝てるようなやり方は熟知してるんだ。

「さ、ご飯にしよう。さっきので疲れちゃってペコペコだよ」

『ハッ！ そうだ！ 飯だ飯イ!!? お姉様！ 早く早く！』

「ハハハ… ルートのこの変わりようにはやっぱり慣れないね」

『そうですね。でも少しづつ慣れていけば良いのですよ。私達はいつまでも一緒なのですから』

「…うん。 そうだね」

こうして、 思わぬ出会いを迎えた今日は終わりを告げる。

何度でも言おう、これが僕の日常だ。そして、次からは新しい非日常日常が始まる。

僕は新たな気持ちで胸にアカデミアへの切符を握りしめた。

落としあいを始めよう

デュエルアカデミア、デュエルのなんたるかを学ぶ孤島に建設された学園、という名の隔離施設。彼らは卒業と退学以外、この門から出る事はない。例外として留学があるがそれはこのデュエルアカデミアにおいても一握りの天才にのみ与えられる。

そんなデュエルアカデミアを象徴する場所、デュエル場にて、一つのデュエルが行われていた。

「ラストだ。トラファスファイアでダイレクトアタック」

「う、うわあああああ」

ダイレクトアタックを決められ少年のライフは0となる。ソリッドビジョンは“坂東義一”の勝利を告げた。

「オイオイ、幾ら何でも弱すぎるだろオ…もちつと俺を楽しませてくれよオナア!!？」

「ひっ、ひいいいいい！そ、そんなこと言っただて坂東君が勝手にデュエルを申し込んで来たんじゃない」

「ああ!?!坂東様だろうがよオ!!?!誰が馴れ馴れしく君なんて呼んでんだコラ!!?!」

怒声を効かせた彼の口調に対戦相手の男の子はビビりまくりである。

それを見た坂東は更に口の端を吊り上げ「良いこと思いついた」と呟いた。

「おお、お前のデツキよこせよ」

「え!?でもそれアンティールールじゃ…」

「はあ!違えーよ、借りるだけだ。俺が飽きるまでな。それともお前は俺に逆らうのか?」

「い、いや…でもデツキは…」

「どうなんだよ!!渡すのか渡せねえのか!!?」

「わ、渡します!!?」

それを聞くと坂東は無理やり彼のデュエルデスクからデツキを抜き取る。

彼の行為は立派なアンティールール。デュエルアカデミアの校則に違反する物だ。当然周りの人間も黙っていない——と言うわけでわ無かった。彼の行為を周りは静観で突き通す。誰も止めようとしなない。

彼、坂東義一は大手企業、坂東グループの御曹司だ。それこそインダストリアルイリユージョン社や海馬コーポレーションと比べればワンランクもツーランクも下ではあるが、それでも社会に対する影響力は絶大な物だ。そして、デュエルアカデミアは坂東グループに経済援助を受けている。たとえ先生だろうと彼には逆らえない。

少年は涙を堪える事しか出来ない。デツキを取られて悔しい。取って行ったコイツ

が憎い。助けてくれないみんなが憎い。誰かコイツを懲らしめてくれ。そう願うしか無かった。

「いやあ、凄いいね。実に素晴らしいよ」

そんな少年の気持ちを知ってか知らずか、静まり返っていた空間に拍手が鳴る。

大袈裟な速い拍手でも馬鹿にしたようなゆっくりとした拍手でも無い。早過ぎず遅過ぎない拍手。だがそれが妙に気持ち悪い。得体の知れない物がべつとりとこびりつく様な気配がして、坂東は音の主へと顔を向けた。

そこに立っていたのは一人の少年。

黒い学ランに黒い髪。全身黒づくめの彼は、良く言えば特徴が無い。悪く言えばモブと言った容姿だった。

だが、常人でも分かるその異質性は何よりも人として拒みたい衝動に駆られる。

坂東は知らず知らずの内尻込みしていた。それでも坂東は引き下がらない。内容はどうあれ彼は自分を褒めたのだ。坂東は彼から発せられるオーラを気のせいだと言いつつ聞かせた。

「へえ、随分と話のわかる奴がいるじゃねえか。お前新入りか？」

「うん。僕は隈ヶ谷 夕斗って言うんだ。今日からこのデュエルアカデミアに転校して来てね。どうぞ一つよろしく」

そうして手を差し出す。坂東としても自分の取り巻きが増えることは大いに嬉しいことだ。当然その手を握るのだが、

「ん？どうしたの？」

とつきに離れた。彼の指先に触れた瞬間、身体が全力で拒否した。坂東には何かなんだか分からない。

対して、握手を拒否されたは少年は気にした様子も無く手を引つ込めた。

「い、いやなんでもない」

「そう、それにしてもさっきのは凄かったね。僕は感動したよ」

大袈裟に腕を広げ身体で表現する。初対面の人間にここまで言われるのは初めてな坂東はちよつとした優越感と羞恥心に駆られる。しかし、尚も彼は続ける。やれ、素晴らしいと、君は天才だと続ける。

そして、

「ああ、素晴らしいよ。本当——

満足に外道にも慣れないクズだなんて、ほーんと君は最低だ」

最後の一言でそれら全てを台無しにした。今まで褒め続けた言葉を全て嘲笑う言葉へと変えた。

「……は？」

坂東は反応が遅れた。今までベタ褒めにされていたのだ、信じられないものを見たといったように目を丸くした。

「だってそうだろう？ あんなぬるいやり方で、さも自分は強いとアピール。しかもその力は親の力。僕だったら恥ずかしくて立ってられないよ。皆んなもそう思うでしょ？」

夕斗はデュエル場に居る生徒達に同意を求めれば、ポツポツと同意の声が上がる。一度ついた火の粉は周りに燃え移り、最終的にはデュエル場の生徒、そして教師全員が夕斗の言葉に同意し炎を巻き上げた。

坂東は理解した。隈ヶ谷夕斗は初めから自分を辱める為にあんな回りくどいやり方をしたのだと。理解したと同時に憤怒した。こんな屈辱を与えられたのは初めてだ。坂東はプライドが高い。そのプライドをここまでコケにされたのだ、坂東は怒りに顔を歪めた。

「そこで怒るのが君の限界さ。君に『負』は重いよ。その重さにすら気づけないようじゃまだまだ三流さ」

夕斗に堪えた様子はない。幾ら坂東が怒りを、殺気を飛ばそうともそれを何事も無かったかのように受け流す。彼の顔には笑みが浮かばれている。常人なら考えられない状況だ。

「だから教えてやるよ。本当の外道、本当の邪悪、本当の理不尽、本当の嫌われ者のデユエル^{ヤリ}方^カ」

夕斗はデユエルディスクを展開する。だが、坂東にとつてこれは好機だ。自分を辱めた相手を完膚なきまでに叩きのめし威厳を取り戻す。こいつの悔しそうな顔を踏みつけ笑つてやる。後悔してももう遅いと教えてやる。

「上等だア！テメエのデツキも奪つて二度と部屋からでれないようにしてやる」
「登校初日にそれは困るね」

怒声を込めた罵声も軽く受け流す。それが気に入らない。目障りだ。
前の障害は叩き壊す。それが代々受け継がれる坂東の血の原点だ。

「デユエル!!?」

二人の宣言によりソリッドビジョンが展開。デユエルが始まる。

「先行は俺が貰うぜ、ドロウ!!?俺は裏守備表示でモンスターをセット、カードを二枚伏せターンエンドだ」

「僕のターン、ドロウ…僕は暗黒界の番兵 レンジを守備表情で召喚。ターンエンド」

「そんな壁モンスターいくら並べたところで意味ねえんだよ!。ハッ!大口叩くからんだだけのもんかと楽しみにしてたがそんなもんか?」

「君こそ少しは静かにしたらどうだい?弱い犬はなんとやらつて言うけど、君を犬扱い

したら犬が可哀想だね」

皮肉を言えば皮肉で返される。今すぐにも殴ってやりたいが、それは後でいい。坂東は気持ち落ち着かせる。どうせ奴がこちらの伏せカードを破壊しなかった時点で奴の負けだ。そう思いカードを引く。

「いいカードだぜ。リバーズカード二枚をオープン。グラヴィティバインドー超重量の網ーを発動！フィールド場のレベル4以上のモンスターは攻撃出来ない。もう一つは魔封じの芳香だ。このカードがフィールド場にある限り互いに魔法カードをセットしなければ発動することは出来ず次の自分のターンでしか発動出来ない」

「出た！坂東さんのロックコンボだ！」

「これであいつは攻撃出来ないし魔法カードも上手く使えないー」

坂東のプレイングに取り巻き目が湧く。しかし、以前として夕斗は平気そうな顔をす。それが坂東には気に入らない。

「その顔、今すぐ苦痛に歪ませてやる。俺は裏守備表示のBFー精鋭のゼピュロスを取りース！トラファスファイアを召喚!!?こいつにトラップは効かねえ。これで俺は攻撃出来る」

トラファスファイア／効果モンスター

星6／風属性／鳥獣族／攻2400／守2000

このカードをアドバンス召喚する場合、

リリースするモンスターは鳥獣族でなければならない。

このカードはフィールド上に表側表示で存在する限り罨カードの効果を受けない。

「トラファスファイアでそのチンケな壁を破壊だ!!? どうだア? 手も足も出せずやられる感覚は…こんなもんじゃすまさねえ。テメエはきつちり壊し尽くしてやる」

「言ってることが小物臭いよ。僕のターン、ドロロー。カードを三枚伏せてターンエンド」
「ハッ! どうした怖気づいたか? 攻撃してこいよオ」

「君が出来なくさせたのによく言うね。ほら、君のターンだ」

側から見れば完全に坂東の優勢だ。攻撃を封じられ、魔法カードもロクに使えない。夕斗は劣勢は明らかなものだ。

それでも、彼の顔は飄々としている。まるでこうなることが当たり前かのように、苦しい顔一つせず黙々とデュエルを続ける。

デュエル場にいた生徒はその姿に飲まれていった。なぜ? どうして諦めないのか。それが彼らには分からなかった。分かるわけもない。彼にとつて劣勢とは普段通りの事で、絶対絶命とは当たり前だということ。

「俺のターンだな。ドロロー、俺はリバースカードオープン。ビッグバン・シユートをトラ

フアスファイアに装備!!?これでコイツは攻撃力を400ポイント上げ貫通効果を得る!
!そのままトランフアスファイアでダイレクトアタックだア!」

トランフアスファイア 2400↓2800

夕斗4000↓1200

「オイオイどうしたア!?!そんなもんかよ味気ないな!もつと面白くしてくれよ、それともお前は口だけだったのかア!!」

「:別に、大したことじゃ無いさ。それよりまだ、君のターンだよ?」

「チツ、生簀かねえな。俺は一枚伏せてターンエンドだ」

(俺が伏せたのは暴君の威圧、これで俺のモンスターはグラヴィテイバインドの効果を受けつかなくなった。次のターン、奴がモンスターを出してきてもゼピュロスを復活させて止めをさせる)

誰もが坂東の勝利を確信した。ここまで徹底的なロックをされ、夕斗の場にはモンスターが0:残りライフは次のターンで削られる。その上相手のライフは一つも削られていない。圧倒的なまでの差が坂東を慢心させた。夕斗に感じた恐怖も忘れていた。アレはやはり勘違いだったんだと納得した。

ゾクッ

瞬間、またあの気配がする。身体中から汗が吹き出る。得体の知れないものが這い上

がつてきて動きを拘束する。そんな感覚。

ふと、前を見る。先程まで自分が勝っていたはず。いや、今も勝っていることには変わらぬ。しかし、勝てない、心のどこかでそう思った。

目の前には笑った夕斗がいた。闇の中で輝く赤い三日月、今の彼を表現するならそれが最適な言葉だろう。

「あくあ、せっかく猶予があつたんだからその間に削りきれば良かったのに……残念だね」
「ま、負け惜しみか!?このライフ差で何が出来る!お前は負けたんだよ!!?」

「デュエルは何が起ころるか分からないから楽しい。成る程、確かにそうだね。今の僕なら歴代主人公達の言葉の意味が分かるよ」

何を訳のわからないことを言っている?坂東の頭は彼の言動でパニックになっていた。既に彼は闇にその手足を縛られている。彼は逃げる事も出来ない。

「それでも、やっぱり僕は彼らとは違うね」

「な、何を……」

「残念だけどこれで終わらせるよ。僕はリバースカードオープン。成金ゴブリン。相手のライフを10000ポイント回復させカードを一枚ドロウする」

坂東LP40000↓50000

「なんだア?諦めちまったのかア?だらしねえなあ」

「まだ終わってないよ。二枚目のリバースカードオープン、活路への希望。1000ポイントライフを払うことで互いのライフの差2000ポイントにつきカードを一枚ドロウする僕のライフは200、キミのライフは5000。二枚のドロウだね」

「チツ、往生際が悪いな。消える時くらい綺麗に消えろよ胸糞悪い」

「そうだね。消える時くらい綺麗に消えて欲しいものだね。ところで言い出しつペの君はきつと綺麗に消えてくれるんだろうね」

「…なんだと?」

「慢心して中途半端に終わらせる。だから君は甘いんだよ。お世辞にもロックデツキを語るならモンスター効果も無効にするべきだったね……僕は最後のリバースカードオープン。手札抹殺。手札を全て捨てその枚数分カードをドロウする。僕は7枚のカードを捨てて7枚ドロウする。さて、それじゃ始めようか」

「忘れたかア? テメエは満足に攻撃も出来なきや魔法すら使えないんだぜ? そんな状態で何が出来る!」

「君こそ忘れたの? 僕はこれで終わらせるって言ったんだ。僕は手札から墓地へと捨てられた暗黒界の鬼神、ケルト、闘神、ラチナの効果を発動。自信を特殊召喚。更に暗黒界の龍神、グラフィアの効果を起動。相手フィールド上のカードを破壊する。破壊するのは魔封じの芳香だ」

「クラヴィティ・バインドじゃ無いのか?!」

「これで魔法カードを発動出来るね。手札から魔法カード 魔法石の採掘を発動。手札を二枚捨てて墓地の魔法カードを手札に加える。僕は手札抹殺を手札に加える。さて、後は分かるよね? 手札抹殺を再び発動。そして手札から捨てられた暗黒界の策士 グリンの効果を発動、フィールドの罠、魔法カードを一枚破壊する。グラヴィティ・バインドを破壊。そして同じく手札から捨てられた暗黒界の武神 ゴルドの効果を発動。捨てられたゴルドは効果で特殊召喚される。更にフィールド魔法暗黒界の門を発動。このカードの効果で悪魔族モンスターは攻・守共に300ポイントアップ。そしてもう一つの効果。墓地の悪魔族モンスターを除外して手札の悪魔族モンスターを墓地へ捨てる。この効果で暗黒界の軍神 シルバを捨て、特殊召喚」

「な、なんだと…」

坂東は目の前の状況に唾然とした。たった一ターン。ライフ200のゴミがたった一ターンで自分の布陣を破壊し、しかも最上級モンスターを4体揃えた。

坂東には4体の魔神を操る夕斗が、それ以上の何か、邪神に見えた。

「僕はまだ通常召喚を行っていない。手札から暗黒界の騎士 ズールを召喚し墓地にいるグラファの効果を発動。場の暗黒界を手札に戻しグラファを特殊召喚する」

「そ、そんな…」

坂東の手札がバラバラと地面に落ち膝をつく。目の前に見えているのはなんだ？ 獄か？ この世の終わりか？

圧倒的なまでに覆されたゲーム盤、その中央には変わらない夕斗の笑みがある。

「本当に情けないね。少し逆転されたくらいで戦意を喪失するなんて。まあ、手品まで使ったのにこれじゃ心が折れても仕方ないのかな？」

手品の言葉に坂東の肩はビクツと震える。その目はもうやめろと告げていた。しかし夕斗はやめない。口元をさらに吊り上げ彼の希望を残らず打ち壊す。

「皆んなはおかしいと思わないかい？ 二回続けてデュエルして、こうも簡単にロックが揃う。随分と運が良いんだね。なーんてそんなの不可能さ。前のデュエルと全く同じ展開、手札にするなんてどんなプロデュエリストでもやれっこない。不正してたんだよ。積み込みってヤツだね」

次第に会場がざわつく。と同時にある疑問が生まれた。そんな事出来るのか、とデュエルディスクは学園から配布されているもの。そう安々と不正出来るものだろうか。改造するにしても一般人の学生には出来ない芸当だ。

そう、一般人の学生には

「彼つて坂東グループの御曹司なんでしょ？ だったらデュエルディスクの改造くらい会社の力を使えば出来るんじゃないかな？」

夕斗の一言に周りは信じられないと坂東の顔を見る。

夕斗は知っていたのだ。彼が坂東グループの御曹司、坂東義一だということも、彼が不正して手札を自分の良いように仕向けているのも、知った上で彼を挑発しデュエルを行った。

本来なら坂東としても二回続けてのデュエルは本望では無かった。場合によつては気づかれる恐れがある。しかし夕斗の言動に血が上った坂東にそんな冷静な判断をする余裕は皆無であつた。

結果、まんまと夕斗の策略に嵌つたのだ。

「言つただろ？これが嫌われ者のデュエルだ。僕は主人^彼公^らの様に優しくないからね。気に入らない奴にはとことんやる。君と同じさ」

——ようこそ、敗者の世界へ——

★

夕斗の勝利で幕を閉じたデュエル場で坂東は項垂れていた。その目には気力のかけらもなくただデュエル終えたの天井を見続けている。

「どうだい？満足できた？」

開始前と変わることなく、笑みを絶やさない。坂東からは先程までの威勢も感じられ

ない。アレだけ場を整え完全な勝利への流れを作ったのにも関わらず全てを台無しにされしかも不正の事実すら発覚された。

坂東の心には虚無感だけが残る。

「どうして、俺は負けたんだ…」

「これはデュエルだ。だとしたら勝敗がつくことは当たり前じゃないか。君は負けて僕は勝った。それだけの事だ」

そう、ただそれだけの事なのだ。なのに自分はそれだけで全て奪われたかのような気分になる。

夕斗の言葉は人を闇へと引きずり込む。

坂東はもうその言葉を聞きたくは無かった。

「…持っけて」

差し出したのは少年のデッキと坂東のデッキ。もうプライドなんて関係ない。早く逃げ出したい。その一心でいっばいだった。デッキを渡せば逃げられる。最初からこんなデュエル、受けなければ良かった。いや、デュエルなんてやらなければ良かったとすら思った。

しかし――

「何を言っているんだい？ 僕が君に構ってやるとでも？ オイオイ冗談はよせよ。僕が君

いた。

(アレ？皆んな静かだね。どうしたのかな？)

『夕斗さん！こんな時こそ決めゼリフだぜ！』

(決めゼリフ？)

『生徒の奴らは夕斗さんの華麗なプレイングと話術に唾然としてるんだよ、そういう時こそ、決めゼリフで締めるんだ！』

(いや、普通に引いてるだけだと思っただけ？でも、決めゼリフかあ)

そう考え一つ思いつく。そういえば、ここはアカデミアだったなど。身体をしつかりと向き直し人差し指と中指を額当てる。

あの英雄ヒーローの言葉を自分のやり方で…

「ガツチャ、最低なデュエルだったぜ」

此処に限ヶ谷夕斗のアカデミア最初のデュエルが終わりを告げた。

学園生活を始めよう〜TURN 1〜

『良かったのですか？マスター』

「ん？何が？」

夕斗は一人、寮にて夕食を食べながらアバターの声に反応した。

デュエルアカデミアには3つの寮が存在する。それは成績の順にオベリスクブルー、ライイエロー、オシリスレッドと分けられており、夕斗はこの最下層、オシリスレッドに配属された。

とはいえ、成績が悪かったわけではない。寧ろ編入試験だということにも関わらず好成績を残し、一部の教師陣にはライイエローの超新星になるかもしれないとすら噂され、中等部から入学していないのが残念だとまで言われていたほどだった。しかし彼はアカデミアの施設を紹介される途中、脱走しあるうことかデュエルを開始。更にその相手はあの坂東グループの御曹司で、しかも勝ってしまうなど教師陣の血の気を引かせる行為を連続した結果、何の因果か「ドロップアウトボーイ」としてオシリスレッドに配属されたのだ。

更に言うならばそのデュエルの影響でオシリスレッドには彼に話しかけるような人

間は一人としておらず、こうして寂しく一人で食事を取っているわけである。しかし、これも彼にとつてはいつも通りの日常。大して堪えた様子は無い。彼にとつては大勢人がやって来たほうが異常事態である。

「んー、やっぱりアバターの料理の方が美味しいね。ここのは少し味が薄いや」

『もう！話をそらさないでください！私は本当に心配しているのですよ！』

「だから何を心配してるのさ」

『あの時のデュエルの事です。あの様な目立つ行いをすればいつウロボロスとやらが現れるか分かったものではありません。それにあの後の事もです』

「それは心配いらぬよ。それにあれも作戦さ」

『作戦？どういうことでしょう』

「僕らの目的は二つ、一つはウロボロスの解体。そしてもう一つは邪神イレイザーの確保だ。ウロボロスの方は置いておくとしても、最優先事項はイレイザーの確保、元々僕達はその為に来たんだからね。そして邪神は強いものに惹かれる」

『——！成る程、そういうことですか』

「本当は彼の行いを見て、彼が持っている可能性も考えたんだけど、見当違いだったみたいだね」

『マスターも仰っていたではありませんか。あの者は外道にも慣れないクズ、私達を扱

うには身分違いも甚だしい。私達を扱えるのは世界広しといえどマスターただ一人で
「ございます」

「アハハ、そう言われると照れるね」

常人ならば決して褒めていた言葉ではないのだが、彼ら彼女らにとつてこれ以上の褒
め言葉は存在しないのだろう。

「さて、そろそろ部屋に戻ろうか。ルートはさつきからお腹すかせて喋らないし、僕も今
日は疲れたしね」

『そうですね、それでは戻りましょうか』

そうして、隈ヶ谷夕斗の壮絶な一日は終わった。

「おい、あいつ一人でブツブツ言いながら飯食つてたぞ」

「しかも最後には笑いながら部屋に戻っていったしよ…」

「やべえよ！俺怖えよ！」

途中、聞こえてしまった悪口にアバター達との関係をもう一度良く考えようと思う夕
斗であった。

★

翌日、今日から僕はデュエルアカデミアのレッド生として学園に通うことになる。に
しても赤い制服って慣れないね、やっぱり今まで通り学ランじゃダメなのかな？

『夕斗さん、それ五回も言って断られたじやねえか』

『マスターの学ランへの愛は何処から来るんですか…』

まあ、無い物ねだり、もとい無理な物ねだりしても仕方ないね。とりあえず講義に向かおうか、初日から遅れるとマズイし早めについておこう。

『マスター、意外と真面目なんですよね』

『普段のあの外道っぷりからは考えられないよなあ』

そこ、さつきから煩いよ。それと講義中はあるまり出てきちやダメだよ。うっかり声出ちやったら大変だしね。

『承りました』『うっ、分かったよ』

よし、そうとなれば早速講義堂へと入ろうか。新しい場所だし、もしかしたら知り合
い未満、他人以上くらいは出来るかもしれないからね。

『望みが低すぎますッ!!?』

ガラガラ↑ドアを開ける音

ササツ↑生徒が避けていく音

バリーン↑ガラスのハートが割れる音

ははッ…分かった、分かったよ。うん。期待なんかして無い、大丈夫大丈夫。

『マスター！お気を確かに、私達がおります！』

『そうだけ！私達が付いてる！タ斗さんは一人じゃない！』

大丈夫だよ。本当に対して期待してなかったから。それにアバターやルートがいることもちゃんと分かっている。僕には君らがいてくれるか十分幸せだよ。

『マスター！』『タ斗さん！』

ふう、さて、ガラスメンタルも回復したし、さつさと席に着こうか。

『うう、席に着くつて言いながら無意識に一番前の端っこに着くあたりが悲しすぎるぜ』『お勞しやマスター…』

さて、講義が始まるまで後10分か、その間にデツキでも見てようかな…「ねえ、そのキミ」それとも何か動画でも「キミだつてば」そういえばこのデュエルアカデミアつて他とはカード技術が違うんだよな「聞いてるの？」やっぱり某学生80%の街の様に隔離された場所だと進歩速度が違うもののかな？「おーい、聞いてますかー」

『あのお、マスター？マスターの事ですから本気なのかどうか疑わしいんですが、もしかして本当に気づいていらつしやらないのですか？』

ん？何のこと？

『アレだよ、アレ』

アレ？

ルートの指す方へ視線を向ければ、

「……………」

盛大に頬つぺたを膨らませた少女がこちらをお睨みになっておらせられた。え？ど
うゆうこと？

『マスターはこの少女から声をかけられること計4回、その全てを無視しております』

「えーマジで!?!」

咄嗟の事について声が出ちゃったけど、まさか本当に!?!

僕が、女の子の問いかけを、無視した、この僕が？

「スンマセンシタアアアアア」

「きやあ!!? な、何?!」

そんな、この僕がまさか女の子からの問いかけを無視するなんて、普段声なんてかけられないせいで耳から入る声なんて全てシャットアウトしてたよ！（アバター達の声は心に直接くるから問題なし）

僕は誠心誠意、全てを込めた土下座を繰り返す。周りの生徒は何事だと僕と少女を見ている。しかし、土下座を止めるわけにはいかない。止められるわけ無いだろう！僕に話しかける事が実に愚かで、無謀で、馬鹿な事だつていうのは僕が一番知っている。

『……まで偉そうな台詞をマイナスに変えられる人、初めて見たぜ……』

「ちよ、ちよと！本当に止めて！ね？皆んな見てるから！」

「いや！良いんだ！これは僕が自分に与えた罰、気がすむまでやらせてくれ！」
「本当にやーめーてー!!？もうバカー!!？」

.....

「落ち着いた？」

「うん、いやはや恥ずかしい所を見せたね」

土下座から約数分、やつと考えるだけの余裕が出てきて自分のしでかした事の重大さにも気づいた。いや、彼女にも悪いことしたね。改めて考えると本当に恥ずかしい事を……まあ、考え過ぎるのもアレだし、この事はこの辺で止めておこう。うん。

そういえば、改めて考えるで思い出したけど、この子どつかで見たことあるんだよなあ……絶対原作知識なのは間違い無いんだけど、どうも思い出せない。制服の色からオベリスクブルーだと言うことは分かるけど……ブルーの主要人物なんてあの天上院くらいしか思いつかないしね。

「それで？僕に何か用かな？」

「あ、そうだった！……オホン、隈ヶ谷夕斗！ボクとデュエルしろ！」

「うん却下」

「へへん！こう見えてもボク結構強つて却下!?なんで!？」

「いやだつてもうすぐ講義始まるし、僕これでも学園生活初日だから先生から睨まれる

事は避けたいんだよ」

『それはもう遅い気がする』

「べ、別に今からじゃないもん！ボクもそのくらい分かつてる！講義が終わった後なら良いんでしょ？」

「うん、それなら構わないよ。僕もデュエリストの端くれだからね。喜んで受けさせてもらおうよ」

にこやかに答える僕に対して、少女はなにやら険しい表情を浮かべる。さつきまで笑顔、では無かったか。まあそれにしてもここまで怒った顔では無かったのに。僕、なんか悪いことしたかな？

「…貴方は本当にデュエルモンスターズが好きなの？」

「それってどういう意味だい？」

「ボクも、あの場所にいたんだ。キミが坂東義一とデュエルしているところを見てたの」
ふと周りを見ると視線があつた生徒が顔をそらしていく。それ以外の生徒もこちらを見ながらヒソヒソと話す。

「…へえ、それで？僕が彼にした仕打ちが許せないと？」

「別にボクは坂東の事はどうとも思つてないよ。問題はその後、キミがデツキを取られた少年にやつたことだよ！」

デツキを取られた少年にやったこと……

夕斗は坂東という男とバトルした後、少年のデツキを持っていった。

少年は凄く喜んでいて、「デツキを取り返してくれてありがとう」そう言った。

しかし、夕斗は返さなかった。彼はこう言った。「何を言ってるの？これは僕が彼に勝つて貰った物で君のものじゃない。これは僕の物だ」

デュエルで得たものはデュエルで取り返す、この理不尽なデュエル脳世界の理を體現した。僕は悪くない。そうとも付け加えた。

これには周りの生徒も黙っていなかった。「酷い」とか「あんまりだ」とか、等といった使い古された罵声を浴びせて来た。

だから夕斗は言った、「さっきまで何も言わなかった腰抜けの君たちが、僕に何を言えるの？君たちもそこにいる彼や僕と同じ、負け犬だ」

結果、逆上した生徒達は少年にデツキを貸し夕斗とデュエル。夕斗は負け彼にデツキを返した。これが昨日起きた事の顛末だ。

以上説明終了〜

「成る程ね、だとしたら君も僕が許せないってことかい？」

「そうさ、ボクは許せない。デュエルモンスターズをこんな風に使うなんて……絶対に許しては置けない！」

少女は立ち上がり叫ぶ。その声にまた注目が集まるが、そんなことお構い無しに僕を指差し睨む。にしても、やっぱり知ってる気がするな…この真っ直ぐな感じがどうも見たことある気がする…：…あー！もう此処まで出てるんだけど…もう少し、もう少しで…！

「もう一度言う、ボクと、この早乙女レイとデュエルしろ！」

ああ、ブルーレイだ。

★

『良かったのかタ斗さん、あんなデュエル引き受けて』

「ん？別に問題ないでしょ。それに何をしようと、何を言おうと僕にデュエルを申し込んでくる人はいなかったからね。僕は彼女の決意を無駄にしたくないんだよ」

『はあ、マスターは女の子の事になると甘過ぎます！それに彼女が言ってたあの事もちゃんと説明すれば』

「それは言わない約束だよ、アバター」

『うう、マスターあ…』

講義も終わりデュエル場を目指す最中、邪神達とタ斗はそんな話をしながら歩いていた。タ斗が女に弱いと言うのはなにも今に始まった事ではないのだ。アカデミアに来

る前にも、学校やカードシヨップ等で女の子と当たる時はいつもの気配はなりを潜めていた。夕斗が女の子に目が無いのか、それとも男女での力の差を尊重するような人なのかアバター達には分かりかねるが、夕斗曰く「女の子の軽蔑の視線が一番キツイんだよね」だそうで、それが最も夕斗らしいと二人も納得している。

『それじゃあの女の子にはいつものデツキ使わないのか?』

「いやいつものデツキだよ。別に昨日の坂…なんだっけ? まあいいや。坂なんとかさんみたいにするつもりは無いけど、向けられた行為にはきつちり全力を持って答えなくちゃね」

あの時、夕斗は坂東の行いに怒りを覚えた。勿論、彼が少年を虐めている事については無い。彼が怒ったのは坂東の心についてだ。

彼は負を営めている。彼は負を恐れ、独りを恐れながらも周りから畏怖される存在を目指した。その心意気が気に入らない。夕斗にとつて負とは誰にも頼らず独りで受け止めるべきものだ。素直に、偽らず、ありのままを受け止める。そこに一切の妥協も許されない。

勿論、夕斗はそれを他人に押し付けるつもりは無い。それは夕斗の生き方で坂東などの生き方は別にある。そこに興味はない。しかし、夕斗は素直なのだ。ムカつけば、ぶっ飛ばす。良くも悪くも素直な性格だ。

結果として、自分の大手企業の御曹司という、安っぽい肩書きを振りかざし負の世界に足を踏み入れたアイツが許せなかった。ただそれだけだ。

「だから今日もよろしくね。また君達の力を借りるかもしれないから」

『夕斗さんの全力つてようはいつも通り卑屈に最低に陰湿に台無しにするつて事だろう？…最高だぜ！全力で力を貸すぜ！』

『このアバターもマスターのため尽力を尽くします！』

夕斗の言葉に邪神達は快く答える。と、デュエル場へと到着した。

デュエル場にはレイ一人、普通ならば学食などで昼食を食べている時間だ。ましてや非公式なこのデュエル、観客なんて居ないだろう。

「先生達に言つてデュエル場使用の許可は取つてあるよ」

「流石オベリスクブルー、信用されてるね」

レイは既にデュエルの準備を終えている。夕斗も対面に立ちデュエルをセットした。

両者にらみ合う。と言つても片や怒気を含んだ視線を、片や飄々とした考えの読み取れない物。そのベクトルは全く違ったものだった。

「ボクが勝つたらキミにはあの少年に謝つてもらおう！」

「いいよ、でも僕が勝つたらそれ相応の物を貰うよ？」

夕斗の言葉にレイの心は揺れる。何を貰われる？負けたらどうなる？そんな思考が

頭の周りを埋め尽くしレイの身体を蝕んでいく。

だが、レイはそんな物に負けはしないと頭を振る。

大好きなデュエルを、あんな風に扱う夕斗が許せない。絶対に勝って頭を下げさせる。

レイの目に迷いは無い。真っ直ぐな信念を持った視線が夕斗を突く。

そんな視線に夕斗はニヤリと口元を緩ませる。

「それじゃあ、楽しいデュエルをしようか」

「絶対に勝つよー！」

「デュエル!!？」

デュエルの火蓋が切って落とされた

学園生活を始めよう～TURN 2～

「先攻は譲るよ」

「それじゃ遠慮なく！ドロー！」

デュエルが始まった。早乙女さんはドローしたカードを見るとニヤリと笑みをこぼす。どうやらいいカードを引いたみたいだね。

そういえば早乙女さんのデッキってなんなんだろう。確か原作では恋する乙女デッキで、TFだとライロデッキだった気がするんだけど。

「ボクは宝玉の樹を発動するよ！」

「宝玉獣!？」

「…知ってるの？ここ以外じゃ珍しいカードだと思うんだけど？」

「あ、うん。ちよつと前に少し見たことがあってね」

「…ふうん、まあいいや。ボクはこの宝玉デッキでキミに勝つ！」

まさか宝玉獣だとはね。僕も驚いたよ。彼女が宝玉獣デッキを使うってことはこの世界にはヨハンは居ないのかな？

そもそもあの世界じゃ宝玉獣はそれぞれ一枚ずつしか無いカードだったはず、『ここ

「以外じゃ珍しい」と言っただって事は此処にはある程度出回ってるってことか。

今後前の世界で有名なカードも出てくるかも知らないな。

「宝玉の樹は宝玉獣と名のついたカードが魔法・罠ゾーンに置かれるたびにジェムカウ
ンターが一つ乗るよ。ボクはカードを裏側守備表示にしてターンエンド」

さて、相手が宝玉獣だと分かった以上、長期戦は望ましくない。多分あのカードも
入ってるだろうからね。

ここは短期戦で一気に叩く

「僕のターン、ドロロー。暗黒界の門を発動！暗黒界の門の効果で悪魔族の攻撃力・守備力
は300ポイントアップする。僕は暗黒界の騎士ズールを召喚！このままバトル！
ズールで裏守備モンスターに攻撃力！」

裏守備モンスターはエメラルドタートル。本来なら攻撃力が劣っている為、ダメージ
を食らうのはこっただけど暗黒界の門の効果で攻撃力は上がっている。そのままエメ
ラルドタートルは破壊された。

「宝玉獣エメラルドタートルの効果、破壊された時墓地へ送らず永続魔法として魔法
ゾーンにセットする。更に宝玉獣が魔法ゾーンにセットされたことよって宝玉の樹
にジェムカウンターが一つ乗るよ！」

「僕はカードを2枚伏せてターンエンド」

返し一ターンはダメージを与えることが出来なかったか。これが仇とならなければ良いんだけどね。

「ボクのターン！悪いけどその厄介な門には退場して貰うよ！ボクはフィールド魔法、虹の古代都市 レインボー・ルインを発動！更にボクは宝玉獣サファイアペガサスを召喚するよ！サファイアペガサスの効果、召喚に成功した時、手札、デッキ、墓地から宝玉獣を魔法ゾーンへセット出来る！サファイア・コーリング!!？」

サファイアペガサス／効果モンスター

星4／風属性／獣族／攻1800／守1200

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、

自分の手札・デッキ・墓地から「宝玉獣」と名のついたモンスター1体を永續魔法カード扱いとして自分の魔法&罠カードゾーンに表側表示で置く事ができる。

このカードがモンスターカードゾーン上で破壊された場合、墓地へ送らずに永續魔法カード扱いとして

自分の魔法&罠カードゾーンに表側表示で置く事ができる。

サファイアペガサスの効果で魔法ゾーンへとセットされたのはアメジストキャット。宝玉獣がセットされたことによって宝玉の樹にジエムカウンターが一つ乗る。これで

3種類目か。

「更に魔法カード・宝玉の導きを発動！ 宝玉獣が二枚魔法ゾーンにセットされている時、デッキから宝玉獣を一体特殊召喚する。来い！ アンバーマンモス！」

これで4種類目

「そして魔法カード、レア・ヴァリユを発動、魔法、罨ゾーンの宝玉獣を相手が決めてそのカードを墓地に送ることでカードを二枚ドロウするよ。さあ、何にする？」

「エメラルドタートルにしようかな」

「じゃあエメラルドタートルを墓地に送りカードを二枚ドロウする！ 更にカードを一枚伏せてボクはこれでターンエンド！ さあ、次のターンで決めるよ！」

怒涛の展開力で宝玉獣を三体。そしてジェムカウンターを揃えた早乙女さんは勝ちを確信した表情だ。

多分、彼女の手札には既にキーカードがあるんだろう。次のターン、モンスターを召喚し宝玉の樹を使えば宝玉獣は全て揃うかもしれない。そうなると確かにこのターンで返すのはきついかもね。

「とは言え、諦める訳にもいかない。ドロウ…バトル。ズールでアンバーマンモスを攻撃」

レイLP4000↓3900

「まだまだこれくらい！ レインボールインの効果を使うまでも無いよ！ 破壊されたアン

バーマンモスは魔法ゾーンにセットする！」

「メインフェイズ2。僕はサイクロンを発動。宝玉の樹を破壊するよ」

「させない！レインボールインの第三の効果！モンスターゾーンの宝玉獣を墓地に送って魔法、畏の効果は無効にして破壊する！」

これでサイクロンは破壊された。けど、計算通りって奴だね。

「魔法カード、暗黒の取引を発動。互いにカードを一枚捨て一枚ドロウする。そして捨てられた暗黒界の策士 グリン。グリンの効果で宝玉の樹を破壊」

「そんな!」

「君の場に宝玉獣はいない。レインボールインの第三の効果は使えないね」

「くつ、前のターンで使っておけば…」

「なかなか削れ無いね。ターンエンドだよ」

両者拮抗。僕のライフは削られてないにしても確実に追い込まれつつある。ターンが経てば経つ程彼女はエースモンスターを出しやすくなるのだから。

「ボクは絶対諦めない！あの少年に謝って貰うんだ！」

そうしてドロウする。そのカードは…

「…フフ、どうやらボクの勝ちみたいだね！ボクは魔法カード宝玉の導きを発動！魔法ゾーンに宝玉獣が二体以上いる時、デッキから宝玉獣を特殊召喚する！この効果でサ

ファイアペガサスを特殊召喚！そしてサファイアペガサスの効果発動！サファイアコーリング！」

魔法ゾーンへ置かれたのはコバルトイーグルだ。

「見せてあげる！アカデミアのデュエルを！」

そう言い、ニヤリと笑う。一体何を……

「ボクは手札からフィールド魔法霧の谷の神風を発動！更に場のサファイアペガサスを手札に戻してA・ジエネクス・バードマンを特殊召喚！風属性モンスターを戻した時攻撃力が500ポイントアップ！でもボクの目的はそこじゃない！風属性モンスターが手札に戻った時霧の谷の神風の効果を発動。風属性モンスターをデツキから特殊召喚！来いサファイアペガサス！そしてもう一度サファイアコーリングを使う！魔法ゾーンにセットするのはルビーカーバンクルだ！」

チューナーモンスター?!まさか、この世界は既にシンクロ召喚が確立されてるのか？しかも、これで彼女の元に6体の宝玉獣が並んだ。でもこれで終わりじゃない。

「更にボクはレベル4サファイアペガサスにレベル3バードマンをチューニング！シンクロ召喚！現れるエンシエント・フェアリー・ドラゴン!!?どうだ！これがアカデミアだけで実装されているシンクロ召喚だ！」

そう言って自分の事のように胸を張る早乙女さん。シンクロ召喚だなんてね。チュー

ナーモンスターだけが存在すると思つてただけ……そうそう上手くはいか無いか。

どうやら本当にこの世界は原作とは違つた世界になつてるようだ。もしかしたらエクスシーズ召喚とかもあるのかな、後で調べておく必要があるね。

というか、ペガサス、もしかしてわざと教えなかつたのか？

……………どうやら次会つた時はちよつと痛い目にあつて貰わないといけ無いみたいだ。

「ボクはエンシエント・フェアリー・ドラゴンの効果を発動！フィールド魔法を破壊してライフを10000ポイント回復する！ブレイン・バック！」

レイLP3100↓4100

「更にデツキからフィールド魔法を手札に加える。ボクはレインボーインを加えるよ。そしてボクはまだ通常召喚を行つて無い！ボクはトパーズタイガーを召喚！これで7種の宝玉獣が出揃つた！」

「くる……！」

「ボクのフィールド、墓地に宝玉獣と名のついたカードが7種類存在する時、ボクは究極宝玉神 レインボー・ドラゴンを特殊召喚する！」

フィールドに降り立つ七色の光を放つ龍。神々しく美しい。僕は単純に綺麗だと思つた。

宝玉獣を統べる最強のドラゴン、レインボー・ドラゴンがここに召喚された。

究極宝玉神 レインボー・ドラゴン効果モンスター

星10／光属性／ドラゴン族／攻4000／守 0

このカードは通常召喚できない。

自分のフィールド上・墓地に「宝玉獣」と名のついたカードが

合計7種類存在する場合のみ特殊召喚できる。

このカードを特殊召喚したターン、以下の効果を発動できない。

●自分のフィールド上の「宝玉獣」と名のついたモンスターを全て墓地へ送る事で、

このカードの攻撃力は墓地へ送ったカードの数×1000ポイントアップする。

この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

●自分の墓地の「宝玉獣」と名のついたモンスターを全てゲームから

除外する事で、フィールド上のカードを全てをデッキに戻す

「レインボー・ドラゴンは召喚されたターン効果を使えない。でもこのターンで終わり

だ！レインボー・ドラゴンで暗黒界の騎士 ズールを攻撃！オーバー・ザ・レインボー

!!？」

夕斗LP4000↓1800

「エンシエント・フェアリードラゴンでダイレクトアタック！エターナル・サンシャイン！！？これで決まりだ！」

「まだ終わらせたりなんかしないよ。僕は手札の速攻のかかしのモンスター効果を発動。自身を墓地に送り攻撃を無効にする」

「くっ……ターンエンド。でもこれでキミのライフは風前の灯火！このターンからはレインボー・ドラゴンの効果も使える。キミの負けは決まったよ！」

負け、か…確かに、彼女のフィールドには三体のモンスター。そのうち一つは攻撃力4000を超える化け物だ。対して僕のフィールドにはモンスターは0。手札も0絶対絶命大ピンチ。これは誰が見ても僕が負ける流れだと思うよ。

「…そういえば、質問に答えて無かったね」

「…なんの話？」

「僕がデュエルモンスターズが好きかって話さ。答えて無かったらどろ？」

「……………」

「このゲームは理不尽だ。強いカードを持つ奴が勝って、弱いカードは勝てない。運のいい奴、運の悪いやつ、勝負をする前から勝敗は決まってるような物さ。初手にブルーアイズ三体に融合と巨大化があれば大抵は1ターンで勝てるようなクソゲーだよ」

「……………」

早乙女さんは何も言わない。ただ睨む。親の仇でも見るかのような目で僕を睨む。彼女は心の底からこのゲームを愛しているんだろう。真正面からこのゲームを見ている。感じている。

それはとても素晴らしいことだ。

そして、それは僕も同じだ。

「でも僕はこのゲームが大好きなんだよ。敗者が勝者をねじ伏せる。弱者が強者に食らいつく。不平等で理不尽な世界は強者と弱者を平等にするんだ。ゲーム盤をひっくり返す為に頭を使う。身体を使う。不運すら使ってみせる。僕はこのゲームがたまらなく好きだよ。僕のデッキは、そんな僕にも力になってくれるからね」

負けそうなスリルにハラハラしたり勝てる興奮にワクワクしたり、そう言った全ての能力を使ったこのゲームが僕は大好きだ。

急な熱弁に、早乙女さんはポカンとしていた。

側から見れば僕は狂っているのだろう。だがそれでいい。僕はいつだって普通とは違っていた。だからこそ彼女達の抛り所となれて、他の観点から物事を観れる。

「それじゃ、続きを始めよう。僕はここから逆転する」

「……この状況でどうやって！」

「さあね、僕も分からない。でもこういう時デツキは答えてくれるものでしょ？それにこんな僕でもワクワクするんだ。たった一枚のカードでひっくり返る、この瞬間が」

「…いいよ！ボクも全力で相手する！」

そうしてドロローする。運命のドロロー。あの布陣を！あの絶対的な強者を！僕はねじ伏せる！

「僕は魔法カード、魔法の泉を発動。このカードは相手の魔法、罠カードの枚数だけカードをドロローし、自分の魔法、罠カードの枚数だけ墓地に捨てる。ただしこのカードが発動しターン相手の魔法、罠カードは破壊されず効果の無効もされない」

「ま、まさか！」

「そのまさかさ。宝玉獣は魔法、罠ゾーンにある時永続魔法扱いされる。キミの場には5枚の永続魔法扱いの宝玉獣。僕はカードを5枚ドロロー!!？」

「そんな！」

「そして僕の魔法、罠カードは二枚。よって手札から二枚墓地に捨てる。捨てるカードは暗黒界の軍神 シルバ。そして暗黒界の龍神 グラファだ。手札から捨てられたシルバの効果、このモンスターを特殊召喚する。更にグラファの効果、相手フィールド上のカードを一枚破壊する。僕はが破壊するのは当然レインボー・ドラゴン」

「そんな！レインボー・ドラゴンがこんなに簡単に破壊されるなんて！」

「更に取りバースカードオープン。罰則金。僕は手札を二枚墓地に捨てる。この効果で捨てるのは暗黒界の刺客。カーキと暗黒界の導師。セルリ。カーキのモンスター効果、相手のモンスターを一体破壊する。僕はエンシエント・フェアリー・ドラゴンを破壊。そして暗黒界の導師。セルリの効果、このカードを相手フィールド上に特殊召喚する」

「ボクのフィールドに!?! いったい何を…」

「セルリは特殊召喚に成功した時相手は手札を一枚捨てる。今のセルリから見れば相手は僕、僕は暗黒界の術師。スノウを捨てる。暗黒界は相手の効果によって捨てられた時、さらなる効果を発動できる。スノウの効果で暗黒界と名のつくカードをデッキからサーチ、更に相手の墓地のカードを自分フィールドに特殊召喚する。僕はデッキから暗黒界の門をサーチ。そしてサファイアペガサスを特殊召喚」

「ボクのサファイアペガサスが！」

「暗黒界の門を再び発動、墓地の悪魔族を除外することで手札を一枚墓地に捨てる。そしてその後一枚ドロウする。グラフィアを除外して手札のページを捨てる。捨てられたページは特殊召喚される。そして一枚ドロウだ」

そうして手をデッキへと伸ばす。きつと来てくれる。確かな自信がある。

この世界で一番信頼できる仲間、この場面を覆す事が出来る存在、さあ行こう。

「僕は三体のモンスターをリリースする」

「三体のモンスターをリリース?!」

「アドバンス召喚! 降臨せよ! 邪神ドレッド・ルート!」

アバターが不条理な闇の集合体であるならばドレッド・ルートは理不尽な力の集合体。

全てを等しく破壊する。破壊を司る邪神、全ての者がひれ伏し見上げる事すら許さない。それがドレッド・ルートだ。

ドレッド・ルートの存在感に早乙女さんは目を奪われている。闇も力も、人を魅了する。

「…凄いな。これがキミのエースモンスターなんだ…」

「そう。僕の大事な仲間さ…ドレッド・ルートの効果発動! このカードが存在する限りこのカード以外のフィールド上のモンスターの攻撃力、守備力は半分となる」

「そんな…!? で、でも例え半分にされたとしてもボクのライフは4100! この攻撃だけじゃ倒しきれないよ! モンスターを全てリリースしたのが仇になったね!」

「確かにこのままじゃ、僕は君を削りきれない。次のターンに君がレインボー・ドラゴンを回収して召喚すれば、君の勝ちだ」

言い終えて息を吸う。勿論そんな事は分かりきっている。ドレッド・ルートが出て僕らのピンチは変わらない。レインボー・ドラゴンにはフィールドをリセットする強力な

起動効果もある。

だが、それがなんだ。絶対的な強者を前にするのはいつもの事。陰口や陰湿な手を使わない辺りよつぽどマシだとも言える。

この場を覆してこそ、僕は僕らしい勝利を飾れるのだ。

「僕は勝つ。言つたでしょ？このターン逆転するつて」

そうして僕はもう一枚のリバースカードをオープンさせる。暗黒よりの軍勢と同じでゲーム序盤から伏せているカード。この場を覆すキーカード

「僕はリバースカード、巨大化を発動するよ。僕のライフが相手のライフより低い場合、装備されたモンスターの攻撃力を倍にする。これによりドレッド・ルートの攻撃力は8000」

「そ、そんな…」

「邪神ドレッド・ルートでトパーズタイガーを攻撃！ファイアースノックダウン!!？」

LEI LP 4100↓0

「ガツチャ、最低なデュエルだったぜ」



「負けちゃた…」

デュエルが終わりレイはへたりと地面に座り込む。夕斗はそんなレイへと近寄り手を伸ばした。

「大丈夫？立てる？」

「う、うん。ありがとう」

夕斗の手を借りてなんとか立ち上がる。

「ごめんね。君相手に手加減なんて出来なかった。君の意思や覚悟に失礼だからね。だからこそ全力で叩き潰した」

夕斗の言葉がレイの頭に響く。彼はデュエリストとして最大の敬意を表示、相手を真つ向から叩き潰した。

それはレイも分かっている。最後の攻防を通して、彼がいかにデュエルモンスターズというゲームを好きであるかを理解した。そうでなければあの場でデツキは彼に答えなかっただろう。レイはデュエルする以前よりスツキリとした表情をしていた。

「強いね。これでオシリスレッドなんて信じられないよ」

「僕は嫌われ者だからね。どうやら先生達にも嫌われちゃったみたいだよ」

そう言って苦笑する夕斗を見てレイも笑う。

デュエルを終えたどうしは友達になる。なんてことは無いが、少なくとも夕斗の気持

ちを理解したレイには彼が言うほど悪い人間に見えなかった。

「ねえ、聞いてもいいかな？」

「どうしたの？」

「キミはどうしてあんな事を、あの少年のデツキを奪つたりしたの？ 周りを煽るような真似までして、キミは何をしたかったの？」

だからこそ、彼がなぜあんな事をしたのか分からなかった。

このデュエルのそもそもの発端。坂東に敗れた少年のデツキを返さなかったこと。これ程までにデュエルが好きな彼なら、こんな行為はしない。何か理由があるんじゃないか、と思った。

レイの質問を聞いた夕斗は一瞬、驚いたような、困つたような顔をしたが、直ぐに何時ものヘラヘラした笑顔に戻る。

「別に理由は無いよ。勝者は得て敗者は失う。自然の理さ。僕はそれに従っただけで理由は無い。まあ結局負けて僕も失っちゃただけだね」

嘘だ。そう直感した。彼の瞳は真つ黒で何も読み取れないけど、その顔は何を考えているのか分からないけれど、それでもそれは嘘だと分かった。

けど、彼が言うならそれも事実になってしまふ。本人が「そうだよ」と言ってしまう、それが事実だ。真実は違ふとも、事実は上書きされてしまふ。

きっとこの先もレイは本当の意味を知ることには無いだろう。彼が変わらない限りレイが真実を知ることが無いのだから。そしてそれはきっとあり得ないことだから。

ところで、話を脱線してしまいが、一度、邪神アバターの性格を確認しよう。

全てを飲み込む闇であり頂点。他の髓を許さず常に最強たる神。

家では家事全般をこなし主人の健康管理まで徹底する。

その忠義の心は本場のメイドさんも圧巻する程であり、基本万能無敵。

DMという欠点と利点を除けば完璧超人、いや完璧超神。

そんな忠義心の塊の様なアバターさんの本質は、邪神でありながらも一言で表すならば、お節介だ。

そうお節介なのだ。どうしようもなく、たまらなく、お節介なのだ。そしてその妹であるルートもまた、お節介である。

『ああー！もう聞いてられません！マスター！今この時だけは意見申し上げます！』

『わ、私もですうー！夕斗さん！今回ばかりは黙って置けません！』

夕斗とレイ、二人しか居ないはずのデュエル場に突如第三者が現れる。黒髪をなびか

せ、この世界でも目立つだろう黒の巫女服を着た少女。アバターと、メリハリの着き目の行き場に困る露出の高い鎧を着た褐色の少女、ルートが現れる。

アバター達は実体化して直ぐに夕斗に詰め寄った。

『マスターは捻くれ過ぎです！確かに私達にとつてそういう感情は嬉しいですが、それでもマスターは自分を追い込みすぎです！』

『本当ですよ！なんで夕斗さんはそんなに傷つこうとするんですかあ！』

「ちよ、アバターさん!? ルートさん!? 落ち着いて……それとんでもう泣き虫モードなの?!」

『これが落ち着いていられますか！マスター、前々から言おう言おうと思っておりますがマスターは孤独を選び過ぎです！』

「い、いや。僕にはアバターさん達がいるし……」

『た、確かに私達は一緒にいますけど……でも夕斗さんは人間なんですよ。幾ら私達と共によいと邪神と人間という立場は変えられません。夕斗さんは一人では生きていけない弱い人間。それは夕斗さんが一番良く知ってるはずですよ!』

『マスターが自ら進んで傷つく姿など、私達は見とう御座いませぬ。分かつて頂けませんか?』

夕斗は何も言わない。ただアバター達を見つめている。

次にアバターはレイへと視線を移した。先程からおきていることに反応出来ず、空気と化していたレイだがアバターに見つめられただけで背筋が伸び冷や汗が湧く。

これは人間が目にして良いものなのか？レイの頭はそんな疑問で埋め尽くされた。「早乙女レイさんでしたか？」

「ハ、ハイ！」

「貴方にお話します。何故あの時、マスターがあんな事をしたのか。その真相を」
告げられた予想外の言葉にレイの顔は真剣な物となる。

アバターは一度夕斗に視線を移したが夕斗は肩をすくめて苦笑していた。アバターはそれを許可と受け取り口を開く。

アバターの話した真相はこうだ。

あの時、坂東に負けた少年は心、そして立場共に最悪の状況だった。

彼は理不尽なデュエルに負け、そしてデッキを取られた。それを周りの人間は助けな
い。

彼は自責の念と周囲への恨みを抱えていた。

邪神はそういった強い負の感情を感知することができる。そして邪神の主でたる夕斗も長年の実体験から第六感で感知する事が出来る。

このままデュエルが終えようと、彼の心の闇は彼を蝕み続けるだろう。

助けなかつた周りを恨み、弱い自分を恨み、彼は孤独の元、その重さに耐え切れず潰れてしまう。

夕斗はその闇を肩代わりする事にした。彼は闇から救い出すなんて芸当は出来ない。出来るのは彼の闇を自分が背負う事だけ。

そして夕斗は行動した。少年の敵意を恨みを自分に向け、周囲の敵意も自分に向くよう仕向けた。共通の敵を用意することで人間は団結する。それを仲間と呼ぶ。

結果、彼らは夕斗を打ち砕く事に成功し、集団の勝利でまた変わらぬ関係に戻ることが出来た。

これが事の真相である。

「そんなやり方、間違ってるよ！」

アバターが話終えると、レイは叫んだ。そんなやり方、絶対に間違っている。

確かに彼のやり方で少年は救われたかもしれない。けれどそれは隈ヶ谷 夕斗という犠牲を払って得た救済だ。他にも方法はあつたはずだ。

進んで孤独を選ぶやり方が正解であるはずがない。純粹で優しい性格であるレイはそのやり方を認めるわけにはいかなかった。

そして同時にレイは思う、どうやったら人の闇を背負える程になれるのだろうか。

自ら進んで孤独を選び、闇を抱えて生きていく。それはもはや人間と呼べるのか…

「間違っている事は否定しないよ。そもそも僕は正解を選ぶつもりもないからね」

対して夕斗の反応は先ほどと変わらない。

「どうして、そこまで……」

「別に彼の為じゃないさ。あーいつた立場は僕のものだからね。他の人間が安々と明け渡す気はさらさらない」

平気そうに話す夕斗を見て、レイは薄ら寒いものを感じる。

彼に一体何があったのか、何が彼をここまでさせるのか、レイの中で次第に疑問は膨れる。

そしてそれと同時に、言いようのない感情が湧き上がる。

正解を選ばないだって？

闇を背負うって？

孤独を選ぶって？

夕斗の言葉がレイの中を駆け巡り、そして爆発した。

「だったらボクが正解を選ばせる！絶対に孤独なんてさせてやらない！夕斗にはボクがいる！友達としてボクが間違えを正す！絶対一人になんてさせてやらないんだから！」

それは怒りだ。進んで傷つく彼への怒り。ムカついた。

レイも夕斗と同じで単純素直な性格なのだ。彼の行動が自分の神経をかつてないほど逆撫でした。

そしてそれは徐々に別の感情へと変わっていく。

ほつとけない。彼を隈ヶ谷 夕斗を一人にして置けない。彼をもつと近くで見て、彼を支える。

デュエルを通して夕斗のことをしった彼女にとってそれがどういう意味なのか、どういう心のあり方なのか分かっていない。けれどもそれに気づくのは時間の問題かもしれない。

いくら世界が狂っていても、彼女が恋する乙女である事は変わらないのだから。

「ボクは離れないよ！何があっても絶対に離れないんだから！」

「いや、ちよつと落ち着いて……」

「落ち着いてるもん！夕斗が闇を背負うつていうならその分ボクの幸せを分けてあげる！」

伸ばされた手を見て、夕斗は突然の事に戸惑う。彼もまた、デュエルを通してレイの人柄を知った。けれどチラつく。過去の記憶が、錆びついて取れない汚れが。そして何より初めて向けられた自分より小さな手にどうすればいいのかわからなかった。

手を振り払われ振り払うやり方を知っていても手の繋ぎ方を夕斗は知らない。

『マスター。大丈夫です。私達がいいます』

『ううっ、良かったですう〜!!?』

その手をアバターが、ルートが引つ張る。彼女達の手によつてレイと夕斗は握手を結ぶ。

夕斗が信じる最高で最低の仲間が彼女の言葉を信じ主の手を引いた。

それを見て笑みを浮かべるレイに夕斗は苦笑する。本心からの笑みではないが、その中に若干の照れと嬉しい気持ちがあるのをアバターは見た。

こうして、曲がった少年と真っ直ぐな少女と邪神達による奇妙な友情が生まれたのだった。

祭りを始めよう

「んー…」

ある日の放課後、購買前のショーウィンドウにひつつく一人の少年が居た。

彼の名は隈ヶ谷夕斗。外道、卑屈、捻くれと負の三拍子を揃えた我らが人類史上最底な主人公である。

そんな彼は先程と変わらずショーウィンドウにかじりつき唸っては首をひねっていた。

「どう？ いいカードはあった？」

そんな彼に声をかける少女、彼女は早乙女レイ。先日夕斗とデュエルして彼のただ一人の人間の友人となった少女である。

明るいボクっ娘でありアカデミアでは密かにファンクラブまでも作られている彼女であるが、最近は何かと夕斗のそばにいるため周りの人間は近寄れずにいるという裏話があるがそれはいつか話そう。

「ん？ ああレイちゃんか。それがね、あまりいい成果とも言えないんだ。凡庸性の高いカードは幾つかゲットしたんだけどね」

そう言う彼の手にはラプアルバル・チェインやTGハイパー・ライブリアンなどどのデッキにも合うカードが握られている。

レイとのデュエルから数日、夕斗はこの時代に存在しない筈であるシンクロモンスター、エクシーズモンスターについて調べていた。

どうやらこの世界では既にシンクロ召喚とエクシーズ召喚は確立されたものらしい。しかし、その召喚方法は過去のデュエルモンスターズを完全に覆す物である。急に世に排出すればパニックや経済的な大事件が起こるのは目に見えている。

そこでこの隔離島の出番というわけだ。この場所は外とは完全に遮断されている。そしてそこには未来を担うプロデュエリストの卵達がいる。

I2社とKCは『新たな召喚方法のテストプレイ』という名目でアカデミアにこれらを導入したのだ。

夕斗にとってこれは嬉しい誤算であった。シンクロやエクシーズがあれば戦術の幅は広がる。更にこの世界、決闘龍等の原作のキーカードまであるときた。それこそ数は限られている上にシヨップで買えばかなり高価なようだがあの能力は是非とも手に入りたい。

だが、No.の存在だけは確認できなかった。この世界でもNo.は特別なカードなのか、それとも存在しない物なのか…アバター達にも聞いてみた夕斗だったが、知らな

いとのことだった。

購買にもそれらしいカードは存在しなかった。

決闘龍も置いてなくそのレアリテイの高さが窺い知れる。

なんにせよ、どちらも今はまだ手に入らないのだ。

「とりあえず、今あるカードだけでも買ってくるよ」

落胆半分、妥協半分でレジへと向かい会計を済ませ購買を出る。横にはレイも一緒だ。

あの後から夕斗とレイはそれこそ寮にいる時間等を抜けばほぼ一緒にいる。講義の時間では教室の端に座る夕斗の横にいるし、昼休みでは夕斗と共に昼食を食べる。帰りだつて寮への分かれ道に入るまでは一緒だ。

レイはこれを友達なら当然！と言っているがやはり度が過ぎている。しかし友達が出来たことのない夕斗にしてみれば、異国の文化を教えられているような物でそういうものなのかと受け止めることしか出来なかった。

そうして寮への道を帰る。その間も何気ない会話が弾む。やれあの教師は頭が硬いとか、やれ彼処のケーキは美味しかったと言ったごく普通の会話を。

「そうそう、彼処で見た服が可愛かったんだー！アカデミアは殆ど制服だし…偶にはオシャレしたいよね」

『やはりレイさんもそういった物に興味がおありなのですね。ルートにも見習ってほしい物です』

『いいんだよ！俺は！動きやすい方がいいだろ！』

『とかいって、実はフリフリのスカートとか集めて着てないだけじゃ無いですか。本当はそういった服着たいのに、何をムキになる事があるのやら』

『お姉さまあ!?!何言ってくれてるんですかッ!?!』

……会話に邪神が参加していなければだか。

レイにはアバター達が見えている。というより見えるようにしてある。

理由はレイ自身がアバターやルートとの会話を望んだ為であり、アバター達も快く了承した。邪神相手にも積極的に関わろうとする彼女のフレンドリーさに夕斗は感心していた。

「さすがは原作キャラってことかな？コミユ力持て余しすぎだよ……」

「?、なんの話?」

「ううん、こつちの話だよ。ほらルートもそんなに怒らない。君が夏物のワンピースを着て鏡の前でニマニマしてるのは僕も知ってるから」

『~~~~ツ!?!?』

レ、レイちゃああああん!夕斗さん達がいじめてきますう~!!?』

「よしよし。いい子いい子」

『「なにこれシールド」』

そういうわけで4人(?)で談笑しながら帰っている。と、レイが思い出したかの様に鞆を探り始めた。そして中から一枚のチラシを出し夕斗に近づける。

「そういえば、ほらこれ見て!」

「ん?何これ」

『アカデミア祭?なんですかこれ』

『う、ううう…お、お祭ですか?』

三人の食いつきがいい事にレイはニヤリと口の端を緩める。

「夕斗は転入生だから知らないだろうけど、アカデミアでは毎年この時期に開かれるんだ。三日間行われて屋台とかも出て楽しんだよ!」

つまりは学園祭みたいな物か。と夕斗は納得する。

「でもデュエルアカデミアだし唯のお祭りじゃないんでしょ?」

「流石夕斗!勿論唯のお祭りじゃないよ。ほらココ!」

レイが指差す場所にはデュエリストキングダム・アカデミア杯と書かれている。名前からして夕斗にはいい気がしない。

「なんと今年からあのペガサスが開催するんだよ!今まではちよつと大きな大会みたい

な物だったのに……夕斗は運がいいね」

「……ハハ、ソウデスネー」

『(あの男、絶対マスターいるからって遊んでますね)』

『(職権乱用だぜ……)』

夕斗達にはI2社でニヤニヤと黒い笑みを浮かべているペガサスが簡単に想像できる。

「豪華商品もあるらしいよ！夕斗も出るでしょ？」

「ん、ん〜どうかな？」

ペガサスの仕向けた大会が胡散臭過ぎてやる気に慣れない。というのが夕斗達の正直な所だ。

どうかなと答えて置きながらも内心、出ない事を決意した。

確かに夕斗もデュエルや豪華賞品は気になる。しかし、それらとペガサスの手の上で踊る事を天秤にかけた場合、どうしても後者に傾くのだ。

「最近、新しいデッキも作ってみようかなと思ってるし、何より余り人が多いところは好きじゃ無いから、遠慮させてもらおうかな？」

「うっ、そ、そっか……」

当たり障りの無い嘘の無い言葉で暈すとレイは目に見えてしょんぼりと肩を落とす。

不覚にも可愛いと思ってしまう夕斗であるが、友達が傷ついてしまったのは頂けない。

「でも最初の屋台とかは回ってみたいかな。お祭りとか久しぶりだから。見て回りたいな」

「ほ、本当！絶対！絶対だよ!!？」

「う、うん」

一言も一緒に行くといった覚えは無いのだが、それでもレイの機嫌が直ったならば良いか。と夕斗は深くは考えなかった。

そうこうしている内にブルー寮とレッド寮への分かれ道へとやって来た。ここでレイとはお別れである。

「それじゃまた明日！ちゃんとお起こしに行くからね」

「レイちゃんが来るから僕は理性と嫉妬の視線でSAN値マツハだよ」

「SAN値?…まあいいや！それじゃあねー！」

そう言つて手を振つて駆け出すレイを見えなくなるまで見送つた夕斗。一度直ぐに帰つてしまったら涙目になって「なんで?!嫌いになつた!?!」とコンマー秒で戻つてきたことがあつた為、こうしている。もはやレイの方が余程友情に飢えているのではと思う程だった。あの時のレイの目は夕斗のトラウマリストに載っている。

そうして見えなくなったところで夕斗は静かに歩き出す。レッド寮まではそこその距離だが、夕斗はこういつた時間は嫌いでは無い。夏の暑さは苦手だが時折吹く涼しげな風が気持ちいい。

「まあそれもこんな状況じゃ無かつたらだけどね」

一人ぼそりと呟き景色を見る要領で後ろを確認する。ぼっちのモンスター効果『私は貴方を見てませんよ。後ろの景色を見ているんです』を発動した。

そこには常人ならば気づか無いだろうが確かに人がいる。茂みと影を利用して視線は夕斗を捉えている。

（アバター、レイちゃんの方に付けさせたルートから報告は？）

『彼方の方にはそれらしき人物は居ない様子、狙われているのはマスターのようでございます』

（成る程、ということとはペガサスの言っていたウロボロスとか言う連中かな？それとも学園の奴らか……敵が多くて分からないね）

ケラケラと心の中で笑うが警戒は解いていない。常に意識は尾行者に向いている。尾行者の方は特に何かする様子も無く一定の距離を保ったまま付けている。

とは言え動く訳にもいかない。相手が尾行をしている以上、こちらが相手に気づいているという事実はまだ相手に知られていない。

こちらが下手なアクションをするよりバレーしていないという安心感を相手に与えるのも一つの手段。手負いの獣ほど手がつけられないというのがそれは人間も同じなのだから。

（気にしても仕方ないか。ルートを呼び戻して普通に帰ろう。相手がこちらに危害を加えない限りね）

『かしこまりました。それではその様に…』

そうして寮へと戻ると尾行者の気配も消えた。何が目的かは定かではないが寮まで用はない様だ。

夕斗は警戒を緩めず自室のドアを開く。と、パサリの何か軽い紙が落ちた様な音がした。

音の先には一通の封筒が。宛先も何も無く、ただ『隈ヶ谷 夕斗様』とだけ書かれている。

（なんだろ。脅迫状かな？それとも不幸の手紙か…）

『真つ先にラブレターとか言い出さ無い辺り夕斗さんらしいぜ…』

『どうしますかマスター。中をご確認なさいますか？なんでしたら私達は席を外しますか…？』

（アバターさんや、その辺りの勘違いは確実に身を滅ぼすよ。ま、中身は見てみようか。

面白そうだしね)

そうして封を切る。開いた瞬間封筒は勢いよく爆発した。

なんて事は無く中には手紙が一枚と、どうやら写真が一枚あるだけの様だ。

先ず手紙を確認する。次に写真を見た時、三人の表情が変わった。

アバターは驚いた表情を、ルートは険しい。そして夕斗はニヤリと楽しそうに口元を吊り上げる。

『どうなさいますか?』

(やるしか無いね。とんでも無い事をしてくれたもんだよ。僕は嫌だつて言ったのに) 『とりあえず顔と言葉は同じにしようぜ』

(おっと……さて、それじゃ今から出来ることはやっておこうか。とりあえず新しいデックスは作り終え無いとね。二人とも、手伝ってもらおうよ)

『はい!』『おう!』

隈ヶ谷 夕斗様

『アカデミア祭、デュエリストキングダムに出場しろ』

簡素にその一文。そしてもう一つの写真の中には…

(イレイザー、か……)

夕斗達がアカデミアへ来た目的。邪神三姉妹の三女、邪神イレイザーが映し出されていた。

夕斗は人知れず手紙を握りしめていた。

(まったく、どこの誰かは知らないけど粹な真似をしてくれるね…)

夕斗は空を睨む。その目は怒りの炎、そして狂気の光が宿っていた。

口の端が更に吊り上がる。

(僕に喧嘩を売ったんだ。普通のままでは帰さないからね…)

後にはドアを閉める音だけが響いた。

祭りを始めよう ～TURN-2～

ここは、どこだろう？

あたりを見回す、真っ黒だ。なのに自分の身体だけはしっかりと確認できている。地面に足がついている感覚はしない。

.....

ああ、なるほど夢か。そうじゃなかったらもう一回死んだのか、なんか死んだ時こんな場所に来た気がするし。

つて、自分で言うのもなんだけど達観しているといかなんというか、落ち着きすぎて自分でも引いちゃうよ。アバター達に出会って僕も変わったのかもね。それが成長と呼べるかはともかくとして……

.....

さて、そろそろ起きないといけないんだらうけどな。今日はアカデミア祭だし、レイちゃんも絶対何時もより早く起こしに来るだらうし。

年頃の男の子の部屋に女の子が入ってくるなんて朝チユン展開、耐えられそうに無いよ。

.....

……はあ、お願いだからそろそろ僕をここへ呼んだ訳を教えてくださいませんか？神様でも悪魔でもなんでも良いからさ

—— なんじゃ、一人話が好きなんじやと思つて待つておつたが、そうでは無いのかの？

好きではあるけどこんなところまで来て永遠とやる程の趣味でも無いよ。

君は誰だい？

—— カカカツ、そう焦るで無い。焦る男は嫌われるぞ？

それは違うよ、女の子に嫌われる男つてのは自分の思い通りになら無い男さ。焦る男つてのはその一例でしかない。

—— フツ、やはり面白いなお主。どうじゃ？本格的に人間やめてこつちに来んか

?

どういう意味かは分かりかねるけど、遠慮しておくよ。……ようやく、普通の友達が出来たからね。その子に愛想尽かされるまでは同じ人間でいたいんだ。

—— カカカツ、残念じゃのう。まあ良いて。そう思うこともまた人間。どれだけに意味を見出すことが無意味なことかは主に問いるまでもなからう。なあに、今回は挨拶程度じゃ。これで失礼するよ

そうなんだ。じゃあ僕も戻ら無いとね。ところで、君の名前はなんなんだい？

—— 言ったところで覚えとらんよ。ここを出た所だな。

それじゃ彼奴らをよろしく頼むぞ、夕斗。

★

えー、本日は晴天なり晴天なり。うん。実に祭り日和だね。

さて、今日は待ちに待ったアカデミア祭。何時もは静かなレッド寮への道も風船や色とりどりの装飾、そして屋台で賑わっていた。

今日は島全体がお祭りムード一色で至る所でどんちゃん騒ぎである。

「ねえねえ！ 凄いや夕斗！ ほら綿あめ！ あ、彼処にはりんご飴もある！」

「あんまりはしゃぐと危ないよ。って聞いて無いか…」

レイちゃんは元気に屋台を見て回っている。つていうかそれ全部食べる気なの？

『マスター大丈夫ですか？お顔が優れませんが』

「大丈夫だよアバター。ちよつと寝起きにキツイエルボーを一発貫っただけだから…」

『目覚まし鳴つても起きないタ斗さんが悪いぜ。あつ！レイちゃん待ってくれ俺も食

べるう！』

『「はあ……」』

レイの後を追っていくルートに苦笑する。

まあ確かに目覚ましで起きなかったのは悪いと思っっているけれど、それにエルボーを食らわせるレイちゃんもどうかと思う。下手したら死んでたよ僕。

にしても何か忘れてる気がする…上手く思い出せ無いけど…もしかしてあのエルボーで!?

………なんてね可能性は十分だけどまさかね。

まさか、ね……

「タ斗ー」

「ん？な n ング?!」

名前を呼ばれ振り向けば何かを口に入れられた。多分食べ物だと思うけど、このままじゃ息が付き無い。慌てて飲み込んだ。

「えへへ、どう？美味しい？」

「お、美味しいけど、出来れば一言言ってからにして欲しかった…」

「言ったらサプライズの意味ないでしょ！」

「サプライズで殺さるってのは、なんとも滑稽な話だね。それより何か良いものあったかい？」

「うん！ほらこれ見て！グリグルカステラ！」

「…中々斬新なカステラだね」

「他にもキラートマト飴とか、クリッター焼きとか」

「……アカデミアの行く末が心配だよ」

「なんだろう、やっぱりこの世界根本的に駄目なんじゃ無いだろうか。海馬社長なにしてるんだよ仕事しろ」

そんなこんなで屋台を回ること数分、アナウンスが聞こえてくる。

『これより、デュエルキングダム・アカデミア杯の受付を始めます。ホールにお集まりください。これより……』

「おっと、それじゃそろそろ行こうか。遅くなって満員なんて洒落にならないしね」
「そうだね〜♪」

「……機嫌だね？ そんなにデュエル大会に出たかったの？」

「それもあるけど……ボクは夕斗と一緒にいられて嬉しいんだあ。夕斗が出ないって言った時本当に悲しかったんだよ？」

そう言つて満面の笑みを向けてくれるレイちゃん。

なんなのこの子天使？ やばいよ僕浄化されちゃうよ真っ直ぐな瞳が眩しくて焼け焦げそうだよッ!!!

『レイさんその調子です！ ほらルート！ もつと別アングルから撮影しなさい！ マスターの照れる顔なんて早々拝めないですよ!?! カメラ使つて永久保存です!』

『お、お姉さまがマジだぜ……とは言え夕斗さんが可愛い事は事実だぜ!』

はあ……なんだろ、もう頭痛い。

★

ホールにて受付を完了した僕らはそのままホールに取り付けられたモニターを見ていた。なにやらルール説明があるようだ。

…嫌な予感がする。しかも確実に当たるような嫌な予感が

『ハロー、アカデミアのスチューデントの皆さん』

起動音と共に耳障りな声が聞こえてくる。やがて映像はハッキリとしていき銀髪長髪な男が映し出された。

ああ、やつぱりの中した…

「へー、アレがペガサス社長かあ…」

レイちゃんが横でつぶやく。正しくは名誉会長。もっと正しく言えば僕と並ぶ下衆野郎だ。

ペガサスはニコリと微笑む。今、僕を見て笑わなかったか？注意深く周りを見渡せば、居た。モニターの少し上に、虫のようだがどうやらアレがカメラなんだろう。僅かだけ視線を感じるしね。

『さて、それではルール説明をさせていただきます。今回、このデュエルキングダム・アカデミア杯ではいくつかの特殊ルールを採用させていただきます。そしてそれともう一つ、あのデュエルキングダムと同様、ポイント制とさせていただきます。ルールは以下の通りです』

そう言う立場が切り替わりルールを映し出した映像が流れる。

デュエルキングダム・アカデミア杯ルール

1. ライフ8000制
2. アカデミア島内に置かれたチェックポイントを周りより多くのポイントを獲得者の勝利

3. 一つのチェックポイントを通れるのは一人一回まで
4. チェックポイント以外で互いで賭け合うことでその場でデュエルすることも可能。

5. 賭けについては試合前、挑まれた側が決定権を有する

6. 勝者は賭けられたポイントを全額受け取る。引き分けの場合互いのポイントは変わらない。

ルール説明が終わると会場の生徒達は動揺を示し始める。特にライフ8000というのは驚きのようだ。僕は前世での記憶があるからそんなに驚かない。レイちゃんも偶に8000制に付き合っつて貰ってたしそんなに驚いていないようだ。

ペガサスは皆んなの驚きを楽しむように微笑んだ後、こう続ける。

『勿論大会優勝者には豪華景品を用意していいマース。ルールを守って楽しくデュエル、皆さんの奮闘に期待しマース』

…よく言う。多分だが彼が今回アカデミアに接触してきたのも僕が、しいては邪神が

目的だろう。邪神はその性質上強者を求める。より強い魂を糧とし存在を保つ。しかしここ最近のアカデミアではそれらしき事件は起きていない。どういう事か分からないが邪神持ちは何かしらの方法で邪神の強者欲求を抑えているようだ。

しかし、今回はどうか。島全体が躍起になってデュエルをする。それも一や二ではなく百単位で。そうなってしまうえば抑える事ができないだろう。

画面は既に消えている。『賞品の為に生贄になれ』なんて言葉を理解出来る奴はここには居ない。本当に僕と並ぶ外道だ。

「ま、今言っても仕方ないよね。それで誘いやすくなってるのは確かだし。イレイザーさえ見つければやられた人は目覚めるし、コラテラルダメージって奴だね」

それに今日はお祭りだ。やっぱり楽しく行かなきゃね。アレが送られてきてる以上、僕を狙ってくるのは間違いないしそれまでは僕もこの祭りの雰囲気を楽しむでしょう。

「もうタ斗！なにブツブツいってるのさ。置いてっちゃうよ」

『そうだぜタ斗さん。早くしないとチエックポイントが埋まっちゃう』

レイちゃん達の声が聞こえる。そうだね、早く行かないと。何事もスタートダッシュは肝心だ。

『マスター…』

「大丈夫だよアバター。向こうがアクションを起こさない限りね」

心配そうに僕の顔を覗き込むアバターに微笑みかけその場を歩き出す。

—— さあ、祭りを始めよう ——

あらゆる陰謀、欲望渦巻くフェスティバルの幕が上がる